

有価証券報告書

事業年度 自 平成29年4月1日
(第104期) 至 平成30年3月31日

日本トランスシティ株式会社

(E04289)

第104期（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

有価証券報告書

- 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

日本トランスシティ株式会社

目 次

頁

第104期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部【企業情報】	2
第1【企業の概況】	2
1【主要な経営指標等の推移】	2
2【沿革】	4
3【事業の内容】	5
4【関係会社の状況】	7
5【従業員の状況】	9
第2【事業の状況】	10
1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	10
2【事業等のリスク】	11
3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	12
4【経営上の重要な契約等】	18
5【研究開発活動】	18
第3【設備の状況】	19
1【設備投資等の概要】	19
2【主要な設備の状況】	19
3【設備の新設、除却等の計画】	20
第4【提出会社の状況】	21
1【株式等の状況】	21
2【自己株式の取得等の状況】	24
3【配当政策】	26
4【株価の推移】	26
5【役員の状況】	27
6【コーポレート・ガバナンスの状況等】	30
第5【経理の状況】	39
1【連結財務諸表等】	40
2【財務諸表等】	75
第6【提出会社の株式事務の概要】	91
第7【提出会社の参考情報】	92
1【提出会社の親会社等の情報】	92
2【その他の参考情報】	92
第二部【提出会社の保証会社等の情報】	93

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月28日
【事業年度】	第104期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）
【会社名】	日本トランスシティ株式会社
【英訳名】	Japan Transcity Corporation
【代表者の役職氏名】	取締役社長 小 川 謙
【本店の所在の場所】	三重県四日市市霞二丁目1番地の1
【電話番号】	四日市059(363)5211（代表）
【事務連絡者氏名】	経理部長 笠 井 文 夫
【最寄りの連絡場所】	東京都港区高輪三丁目23番17号 品川センタービルディング
【電話番号】	東京03(6409)0382（代表）
【事務連絡者氏名】	関東支社長 半 田 一 久
【縦覧に供する場所】	日本トランスシティ株式会社 中部支社 名古屋支店 （名古屋市中村区名駅南一丁目16番28号 NMF名古屋柳橋ビル） 日本トランスシティ株式会社 関東支社 東京支店 （東京都港区高輪三丁目23番17号 品川センタービルディング） 日本トランスシティ株式会社 関西支社 大阪支店 （大阪府中央区南本町三丁目6番14号 イトウビル） 株式会社名古屋証券取引所 （名古屋市中区栄三丁目8番20号） 株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第100期	第101期	第102期	第103期	第104期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高 (百万円)	88,606	92,496	93,217	91,332	95,609
経常利益 (百万円)	4,413	4,053	4,507	3,757	3,121
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	2,686	2,789	2,964	4,021	2,084
包括利益 (百万円)	3,358	5,319	1,507	5,703	3,172
純資産額 (百万円)	45,106	50,076	50,992	55,948	58,591
総資産額 (百万円)	95,548	100,203	97,687	112,837	121,216
1株当たり純資産額 (円)	684.55	755.51	770.83	848.60	884.14
1株当たり当期純利益金額 (円)	41.75	43.37	46.13	62.85	32.55
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	46.1	48.5	50.6	48.1	46.8
自己資本利益率 (%)	6.3	6.0	6.0	7.8	3.8
株価収益率 (倍)	7.6	8.6	8.2	7.4	14.4
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	5,893	4,168	5,276	5,537	2,893
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△2,687	△4,129	△2,096	△10,565	△11,888
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△877	△1,305	△4,382	5,094	7,705
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	12,648	11,652	10,659	10,746	9,526
従業員数 (名) (外、平均臨時雇用人員)	2,196 (848)	2,211 (832)	2,184 (798)	2,214 (745)	2,238 (744)

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3 従業員数は、就業人員数を記載しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第100期	第101期	第102期	第103期	第104期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高 (百万円)	81,335	81,362	79,379	79,073	83,457
経常利益 (百万円)	2,978	2,675	2,847	2,529	2,211
当期純利益又は当期純損失 (△) (百万円)	△101	1,960	2,007	3,299	1,489
資本金 (百万円)	8,428	8,428	8,428	8,428	8,428
発行済株式総数 (株)	67,142,417	67,142,417	67,142,417	67,142,417	67,142,417
純資産額 (百万円)	33,169	36,113	36,748	40,097	41,383
総資産額 (百万円)	81,741	83,319	81,005	89,938	95,675
1株当たり純資産額 (円)	515.65	561.49	573.21	627.44	645.49
1株当たり配当額 (円)	9.00	9.50	10.00	10.00	10.00
(内、1株当たり 中間配当額) (円)	(4.00)	(4.00)	(4.50)	(5.00)	(5.00)
1株当たり当期純利益金額 又は当期純損失金額 (△) (円)	△1.58	30.48	31.24	51.56	23.26
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	40.6	43.3	45.4	44.6	43.3
自己資本利益率 (%)	△0.3	5.7	5.5	8.6	3.7
株価収益率 (倍)	—	12.2	12.1	9.1	20.2
配当性向 (%)	—	31.2	32.0	19.4	43.0
従業員数 (名)	667	681	684	666	642

- (注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。
2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3 第100期の株価収益率および配当性向については、当期純損失が計上されているため記載しておりません。
4 従業員数は、就業人員数を記載しております。
5 臨時従業員は僅少のため記載しておりません。

2 【沿革】

- 昭和17年12月 港湾運送業等統制令に基づき、資本金100万円をもって四日市港運株式会社として設立。
- 昭和18年11月 四日市港湾荷役株式会社（現・四日市海運株式会社・連結子会社）を設立。
- 昭和20年10月 旧四日市倉庫株式会社（明治28年7月設立）を合併し、商号を四日市港運倉庫株式会社と変更。
- 昭和22年5月 冷凍倉庫部門を分離し、極東冷蔵株式会社（現・連結子会社）を設立。
- 昭和24年5月 商号を四日市倉庫株式会社に変更。
- 昭和24年11月 名古屋証券取引所へ株式を上場。
- 昭和25年7月 通運事業および一般貸切貨物自動車運送事業を開始。
- 昭和36年10月 東京証券取引所市場第一部へ株式を上場。
- 昭和38年5月 セントラル自動車整備株式会社（現・連結子会社）を設立。
- 昭和45年6月 資本金を20億円に増資。
- 昭和45年7月 朝日海運株式会社（現・連結子会社）へ資本参加。
- 昭和49年7月 三鈴開発株式会社（現・連結子会社）を設立。
- 昭和52年2月 四倉不動産株式会社（現・ヨンソー開発株式会社・連結子会社）を設立。
- 昭和56年6月 住友商事株式会社との合弁で、中部コールセンター株式会社を設立。
- 昭和60年5月 Yokkaichi America Corporation（現・Trancy Logistics America Corporation・連結子会社）をロサンゼルス（アメリカ合衆国）に設立。
- 昭和62年10月 公募新株式発行により資本金を39億3千8百万円に増資。
- 平成2年10月 Yokkaichi(Thailand)Co.,Ltd.（現・Trancy Logistics(Thailand)Co.,Ltd.・連結子会社）をバンコク（タイ）に設立。
- 平成3年10月 資本金77億9千万円となる。
- 平成3年10月 Trancy Logistics(Singapore)Pte.Ltd.をシンガポールに設立。
- 平成4年4月 日本トランスシティ株式会社に社名変更。
- 平成7年7月 創業百周年。
- 平成7年12月 Trancy Logistics(H.K.)Ltd.（現・連結子会社）を香港に設立。
- 平成8年3月 四日市港国際物流センター株式会社が稼動。（会社設立：平成6年4月）
- 平成9年3月 東京支店東松山物流センターが完成。
- 平成10年5月 輸出貨物部（現国際貨物部）ISO9002の認証取得。
- 平成10年8月 大阪支店枚方物流センターが完成。
- 平成12年5月 Trancy Logistics Philippines, Inc.をマニラ（フィリピン）に設立。
- 平成12年9月 Trancy Logistics(Malaysia)Sdn.Bhd.をペタリングジャヤ（マレーシア）に設立。
- 平成12年12月 PT.Naditama-Trancy Logistics Indonesia（現・連結子会社）をジャカルタ（インドネシア）に設立。
- 平成13年2月 株式会社東西荷扱所（現・連結子会社）へ資本参加。
- 平成13年10月 Trancy Logistics(Europe)GmbHをデュッセルドルフ（ドイツ）に設立。
- 平成14年1月 消費財専用物流センター運営のため、連結子会社「トランスシティロジスティクス中部株式会社」を設立。
- 平成14年6月 ISO14001の認証取得。
- 平成14年10月 消費財専用物流センター「イオン中部RDC」が稼動。
- 平成16年7月 タイにおいて自動車部品専用物流センターが稼動。
- 平成16年8月 Trancy Logistics Mexico S.A.de C.V.をアグアスカリエンテス（メキシコ）に設立。
- 平成17年4月 資本金81億2千万円となる。
- 平成17年9月 資本金84億1千万円となる。
- 平成17年12月 Trancy Logistics(Shanghai)Co.,Ltd.（現・連結子会社）を上海（中国）に設立。
- 平成22年1月 Trancy Logistics(Vietnam)Co.,Ltd.（現・連結子会社）をハノイ（ベトナム）に設立。
- 平成23年8月 Trancy Logistics(Cambodia)Co.,Ltd.をプノンペン（カンボジア）に設立。
- 平成23年12月 Trancy Logistics(Singapore)Pte.,Ltd.を清算。
- 平成26年4月 JSR物流株式会社へ資本参加し、社名をジェイトランス株式会社（現・連結子会社）に変更。
- 平成26年6月 霞北埠頭流通センター株式会社（現・連結子会社）を設立。
- 平成28年10月 Trancy Distribution(Vietnam)Co.,Ltd.（現・連結子会社）をハノイ（ベトナム）に設立。
- 平成29年5月 霞北埠頭流通センターが稼動。
- 平成29年9月 幸手物流センターが稼動。

3【事業の内容】

当社グループは、当社、子会社44社および関連会社14社で構成され、物流関連事業として倉庫業、港湾運送業、陸上運送業、国際複合輸送業等を営む他、その他の事業として不動産業、ゴルフ場経営、自動車整備業等を営んでおります。当社グループの事業に係わる位置付けおよびセグメントとの関連は、次のとおりであります。

(1) 総合物流事業

(倉庫業)

当事業は、当社の主体業務であり、寄託を受けた物品を倉庫に保管し、その対価として保管料を収受しております。当社は、倉庫業法に基づく倉庫営業の許可を受け（一部施設においては、関税法に基づく保税蔵置場の許可を受けております。）、保管貨物の受渡しおよび担保金融に便益を提供するための倉荷証券発行の許可も受けております。倉庫保管業務に関連して寄託貨物の入出庫、配送および軽易な加工業務を行い、その対価として荷役料、配送料および附帯・物流加工料を収受しております。

[関係会社]

㈱トランスシティサービス、関西トランスシティサービス㈱、四日市物流サービス㈱、中部トランスシティサービス㈱、鹿島トランスシティサービス㈱、トランスシティロジスティクス中部㈱、トランスシティロジワークス三重㈱、水島トランスシティサービス㈱、極東冷蔵㈱、四港サイロ㈱、南大阪埠頭㈱、霞北埠頭流通センター㈱、中部コールセンター㈱、四日市港国際物流センター㈱、高橋梱包運輸㈱、東海団地倉庫㈱、タカスエトランスポート㈱

(港湾運送業)

港湾運送事業とは、港湾において海上輸送と陸上輸送を接続させるもので、国土交通省の免許を必要とする貨物の船積みおよび陸揚げ作業および荷捌きを行う事業とこれに付随する事業を行っております。

当社および当社関係会社は、四日市港において港湾運送事業法に規定する一般港湾運送事業、船内荷役事業、はしけ運送事業、沿岸荷役事業を営み、名古屋港では沿岸荷役事業、鹿島港、水島港、横浜港では一般港湾運送事業（限定）、大阪港では沿岸荷役事業を営んでおります。また、名古屋、横浜、大阪、神戸、門司、東京、函館の各税関から通関業の許可を受けております。当事業の主な収入は、船内荷役料、沿岸荷役料、上屋保管料、通関料等から構成されます。

[関係会社]

四日市海運㈱、朝日海運㈱、四日市ポートサービス㈱、㈱東西荷扱所、四日市 SHIPPING ㈱、愛三商船㈱、ワイケイ物流サービス㈱、四日市コンテナターミナル㈱、四日市梱包㈱、四日市港埠頭㈱

(陸上運送業)

貨物自動車運送事業法、貨物利用運送事業法に基づき、三重県、愛知県、岐阜県、滋賀県、大阪府、兵庫県、岡山県、福岡県、茨城県および首都圏において、貨物自動車運送業および貨物利用運送事業を行っております。また、鉄道を利用した利用運送事業を関西線四日市駅、塩浜駅、東海道本線名古屋貨物ターミナル駅、大阪貨物ターミナル駅、水島臨海鉄道東水島駅および鹿島臨海鉄道奥野谷浜駅ならびに神栖駅において行っております。

[関係会社]

四倉運輸㈱、九州シティフレイト㈱、鹿島シティフレイト㈱、中部シティフレイト㈱、大阪シティフレイト㈱、関東シティフレイト㈱、ジェイトランス㈱、T S トランスポート㈱、亀山トランスポート㈱

(国際複合輸送業他)

輸出入貨物を荷送人の指定場所から荷受人の指定場所まで、一貫した運送責任を持ったスルーB/Lを発行し最適な輸送手段を用いて運送を行う国際複合輸送業、国際間の航空貨物の運送に関する諸業務を行う航空貨物運送代理店業、工場内の作業の請負などを行っております。

[関係会社]

Trancy Logistics America Corporation、Trancy Logistics(Thailand)Co.,Ltd.、PT.Naditama-Trancy Logistics Indonesia、Trancy Logistics(H.K.)Ltd.、Trancy Logistics Philippines,Inc.、Trancy Logistics(Europe)GmbH、Trancy Logistics Mexico S.A.de C.V.、Trancy Logistics(Shanghai)Co.,Ltd.、㈱アーガスインターナショナル、Trancy Logistics(Malaysia)Sdn.Bhd.、Trancy Logistics(Vietnam)Co.,Ltd.、Trancy Logistics(Cambodia)Co.,Ltd.、Trancy Distribution(Vietnam)Co.,Ltd.、四日市ケミカルステーション㈱

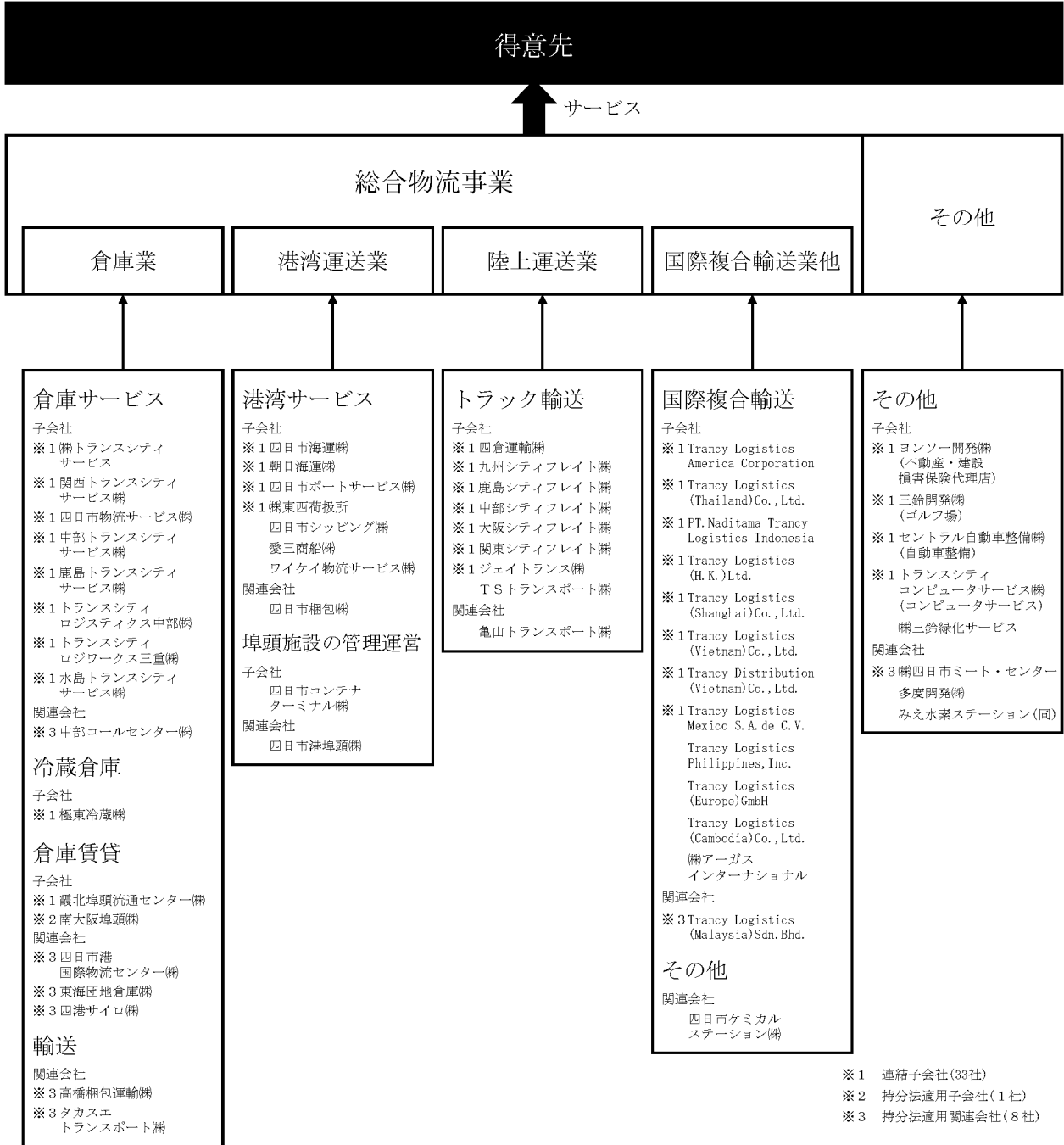
(2) その他

不動産業、建設業、損害保険代理店業、自動車整備業、ゴルフ場、情報システムの企画・開発・保守および運用管理業務、水素供給事業を営んでおります。

[関係会社]

ヨンソー開発(株)、三鈴開発(株)、セントラル自動車整備(株)、トランスシティコンピュータサービス(株)、(株)三鈴緑化サービス、(株)四日市ミート・センター、多度開発(株)、みえ水素ステーション(同)

事業の内容と当社および子会社、関連会社の当該事業における位置づけならびにセグメントの関連など事業系統図を示すと次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の所有 (又は被所 有) 割合 (%)	関係内容
(連結子会社) 四日市ポートサービス株式 会社	三重県四日市市	20	総合物流事業	100.0	当社に港湾荷役サービスを提供して おります。役員の兼任1名(注6)
四日市海運株式会社	三重県四日市市	20	総合物流事業	88.5	当社に港湾荷役サービスを提供して おります。役員の兼任3名(注6)
朝日海運株式会社	大阪府堺市堺区	24	総合物流事業	100.0	当社に港湾荷役サービスを提供して おります。役員の兼任1名(注6)
極東冷蔵株式会社	三重県四日市市	130	総合物流事業	89.4 (0.9)	当社は冷蔵倉庫設備を再保管先と して利用しております。役員の兼 任2名(注6)
四倉運輸株式会社	三重県四日市市	20	総合物流事業	100.0	当社にトラック輸送を提供して おります。(注6)
株式会社トランスシティサー ビス	埼玉県東松山市	10	総合物流事業	100.0	当社に倉庫荷役サービスを提供して おります。(注6)
関西トランスシティサービ ス株式会社	大阪府枚方市	10	総合物流事業	100.0	当社に倉庫荷役サービスを提供して おります。(注6)
四日市物流サービス株式 会社	三重県四日市市	10	総合物流事業	100.0	当社に倉庫・港湾運送業の荷役サ ービスを提供しております。役員 の兼任1名(注6)
中部トランスシティサービ ス株式会社	愛知県北名古屋 市	10	総合物流事業	100.0	当社に倉庫荷役サービスを提供して おります。(注6)
トランスシティロジスティ クス中部株式会社	三重県四日市市	450	総合物流事業	100.0	物流センター運営会社として、 当社に物流加工サービスを提供 しております。(注6、7) 債務保 証額650百万円
株式会社東西荷扱所	神奈川県横浜市	35	総合物流事業	100.0	当社に港湾荷役サービスを提供して おります。(注6)
霞北埠頭流通センター株式 会社	三重県四日市市	100	総合物流事業	83.4	当社に倉庫スペースを提供して おります。役員の兼任1名(注6)
Trancy Logistics America Corporation	米国カリフォル ニア州 トーラ ンス	61万 USドル	総合物流事業	100.0	当社の国際複合輸送において米 国での代理店となっております。 役員の兼任1名
Trancy Logistics (Thailand)Co.,Ltd.	タイ国バンコ ク市	1,000万 タイバーツ	総合物流事業	49.0 (5.5)	当社の国際複合輸送においてタイ 国での代理店となっております。 (注5)
Trancy Logistics (Shanghai)Co.,Ltd.	中国上海市	650万 人民元	総合物流事業	100.0 (100.0)	当社の国際複合輸送において中 国での代理店となっております。 債務保証額80百万円
セントラル自動車整備株式 会社	三重県四日市市	30	その他	100.0	当社の荷役機器、輸送機器の点 検・修理を行っております。役員 の兼任1名(注6)
三鈴開発株式会社	三重県鈴鹿市	10	その他	100.0	役員の兼任3名(注6、8)
ヨンソー開発株式会社	三重県四日市市	75	その他	100.0	当社の建物等の建築工事および 営繕を行っております。役員 の兼任2名(注6)
その他15社	—	—	—	—	—
(持分法適用非連結子会社) 南大阪埠頭株式会社	大阪府泉大津市	48	総合物流事業	56.3 (16.7)	当社に倉庫スペースを提供して おります。役員の兼任1名
(持分法適用関連会社) 中部コールセンター株式 会社	三重県四日市市	1,800	総合物流事業	45.0	当社に石炭の保管スペースを 提供してしております。役員 の兼任2名
四日市港国際物流センター 株式会社	三重県四日市市	150	総合物流事業	50.0	当社に倉庫スペースを提供して おります。役員の兼任2名
株式会社四日市ミート・セ ンター	三重県四日市市	100	その他	50.0	役員の兼任2名
高橋梱包運輸株式会社	神奈川県座間市	10	総合物流事業	33.3	当社にトラック輸送を提供して おります。
その他4社	—	—	—	—	—

- (注) 1 主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。
- 2 有価証券届出書または有価証券報告書を提出している会社はありません。
- 3 議決権の所有割合欄 () 数字は、間接所有割合 (内数) であります。
- 4 上記の子会社はいずれも売上高 (連結会社相互間の内部売上高を除く) の連結売上高に占める割合がそれぞれ100分の10以下であるため主要な損益情報等の記載を省略しております。
- 5 持分は100分の50以下であります。が、実質的に支配しているため子会社としたものであります。
- 6 連結子会社22社において資金管理の効率化を推進する目的でキャッシュマネジメントシステムを導入し、当社との間で資金の貸付けおよび借入れを行っております。
- 7 特定子会社であります。
- 8 債務超過会社であります。(平成30年3月31日現在の債務超過額3,947百万円)

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成30年3月31日現在

セグメントの名称		従業員数 (名)
総合物流事業	倉庫業	816 (467)
	港湾運送業	488 (93)
	陸上運送業	247 (51)
	国際複合輸送業他	602 (123)
	計	2,153 (734)
その他		85 (10)
合計		2,238 (744)

- (注) 1 従業員数は当社グループから当社グループ外への出向者を除く就業人員数であります。
2 従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
3 臨時従業員には、パートタイマーおよび嘱託契約の従業員を含み、派遣社員を除いております。

(2) 提出会社の状況

平成30年3月31日現在

従業員数 (名)	平均年齢 (歳)	平均勤続年数 (年)	平均年間給与 (円)
642	38.3	14.4	6,821,473

- (注) 1 従業員数は、当社から当社外への出向者を除き、当社外から当社への出向者を含む就業人員数であります。
2 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含んでおります。
3 臨時従業員は僅少のため記載しておりません。
4 当社のセグメントは「総合物流事業」単一であります。

(3) 労働組合の状況

当社グループの従業員2,238名の内、647名が全日本港湾労働組合四日市支部をはじめとする8つの労働組合に加入しております。

なお、労使関係に特に記載すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

今後のわが国経済は、政府の経済政策等により企業業績の拡大や雇用情勢の改善を背景に、景気は回復を持続し、内外需要の回復を受けて鉱工業生産の増産基調、設備投資の増加基調で推移すると思われま。しかしながら、米国の保護主義的な志向や地政学的リスクが顕在化するなど、海外の政治動向に不透明感が強く、景気の下振れリスクが依然として残存しており、景気の動向は引き続き先行き不透明な状況が続くものと思われま。

物流業界におきましては、世界経済の拡大基調が継続するなかで、輸出入は堅調に推移することが予想されま。が、運転手をはじめとする物流業界の人手不足の深刻化や労働条件改善への対応など、景気拡大を抑制する懸念材料があることから、物流を取り巻く環境は、今後も引き続き厳しい状況が続くものと思われま。

このような状況のもと、当社グループでは、様々な事業環境の変化に対応するため、昨年4月から開始した「中期経営計画」に掲げる、スローガン『Trancy Innovation 2019－革新－』、基本方針「グローバルな領域で、お客さま満足、従業員満足を追求する集団となり、時代を先取りしたスピード感で物流品質・安全の向上と新たな価値・事業基盤の創造により、『Trancyのロジスティクス』を確立する」に基づき、「国内ロジスティクス事業の強化」、「グローバルロジスティクス事業展開の加速」、「国内外におけるグループ経営基盤の強化」、「グループCSR経営の推進」の4つの経営戦略に全力で取り組み、様々な施策を実施してまいりま。

<国内ロジスティクス事業の強化>

成長産業、新規領域における事業を拡大するとともに、昨年稼動した新拠点を効率的に活用し、競争力のある物流サービスを提供してまいりま。また、四日市港のコンテナ定期航路誘致活動の促進とバルク貨物の取扱拡大ならびに港湾物流機能強化を図ってまいりま。

<グローバルロジスティクス事業展開の加速>

グローバルロジスティクス事業の中核としての機能を目的に本年4月、「海外本部」を新設し、同本部の主導のもと、開設したハンバリー駐在員事務所における欧州域内での物流事情調査等、基盤強化に努めてまいりま。また、タイにおいては、当社グループ2社目となる現地法人を設立し、アジア域内の営業拡大を見据えた機能強化を行うなど、グローバルネットワークを強化し、取引先の要望に応える高品質な事業展開を図ってまいりま。

<国内外におけるグループ経営基盤の強化>

お客さまからの信用と信頼を得るために、当社グループの4つの現場（営業・事務・作業・輸送）の物流品質・安全文化を確立するとともに、その原動力となるグループ社員が活躍できる諸制度の再構築を引き続き推進してまいりま。また、今後の労働力人口の減少を見据えて、ダイバーシティを促進するとともに、IT技術を活用した省人化・効率化を推進し、付加価値を創出してまいりま。さらに、執行役員制度により、業務執行機能の一層の強化に取り組み、企業価値の向上を図ってまいりま。

<グループCSR経営の推進>

高い倫理観をもって社会的な責任を果たすため、コーポレートガバナンスの強化ならびに大規模災害へのリスク管理体制の強化を図ってまいりま。また、健康経営と環境経営を積極的に推進してまいりま。

[最終年度（平成31年度）数値目標]

連結売上高1,100億円、連結経常利益55億円

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項については、以下のようなものがあります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営環境の変化によるリスク

国内外景気の動向によっては、荷動きの低下、荷主の在庫調整、輸送量の減少、荷主からの物流合理化要請、企業間競争の激化など、事業に対する様々な影響が予想されます。

(2) 規制・法令違反リスク

総合物流事業では、各種業法をはじめとして様々な法規制を受けており、法令違反により営業停止などの処分が課せられれば、経営に多大な影響を及ぼすこととなります。当社では、コンプライアンス委員会を設置し、同委員会の下、コンプライアンス相談窓口の設置や社員への啓蒙活動など、コンプライアンス体制の強化を図っております。また、全国で7弁護士事務所と顧問契約を締結し法務リスクに対応しております。

(3) 自然災害リスク

当社グループでは、経営資源が中部地区に集中していることから、特に南海トラフ巨大地震等の大規模地震の発生による被害が懸念されるため、防災計画および地震発生時初動マニュアルを定め、社員の意識高揚や被害の軽減を図るとともに、スクラップ・アンド・ビルドを順次実施しております。

なお、当社では、地震発生時の建物や設備等の損失を補填するため、地震デリバティブ契約を締結しております。

(4) 財務・会計リスク

財務・会計面では、不良債権の発生が最大のリスクであり、平素より回収サイトの短縮や立替金の早期回収に努めており、営業債権についての与信管理を行っております。また、投資有価証券につきましては、株式市場の動向や発行会社における財務状況の悪化により特別損失が発生する可能性があります。

他にも為替リスクや金利の上昇によるリスクが想定されます。

なお、今後、保有資産の市場価格が大幅に下落した場合や、市況の悪化により当該資産の収益性が低下するなど、将来十分なキャッシュ・フローが見込めない場合は、減損損失が発生する可能性があります。

(5) 海外リスク

当社グループでは、中国、東南アジア、北中米、ヨーロッパにおいて海外拠点を有しておりますが、海外情勢の悪化、インフラの未整備、現地固有の法規制・慣習等による予測困難な事態の発生などが想定されます。

(6) オペレーショナル・リスク

総合物流事業を主たる事業とする当社グループにとって、貨物事故、労働災害事故などの発生が重なれば、得意先だけでなく、社会的な信用を失うことになるため、当社では品質管理委員会を設置し、物流品質の維持・向上を図っております。

(7) 情報リスク

情報機器の長時間に及ぶダウン、外部からの侵入（コンピュータウイルスやハッカー等）、情報の漏洩等、様々なリスクが想定されるため、情報セキュリティ管理規程や個人情報保護規程を定めるとともに、危機管理対策として基幹系システムにおける運用のアウトソーシングおよび主要機器（サーバー）のデータセンターへの移管を推進するなど、諸施策を実施しております。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績およびキャッシュ・フローの状況の概要は次のとおりであります。

(1) 経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、企業収益や雇用・所得環境の改善により緩やかな景気回復基調で推移したものの、米国の政策運営や近隣諸国との地政学的リスクの影響で、世界経済の不確実性が高く、日本経済は依然として先行き不透明な状況となりました。

こうした経済環境のなか、物流業界におきましては、世界経済の拡大基調を受けて、輸出入の取扱いが堅調に推移し、なかでも輸入では消費財の好調な荷動きが続き、電子部品など生産財の荷動きも回復を持続しました。国内物流では食品工業品など消費関連貨物および一般機械・自動車部品など生産関連貨物も堅調に推移しました。

このような事業環境のなか、当社グループにおきましては、「中期経営計画」に基づき、様々な施策を実施いたしました。具体的には、国内ロジスティクス事業の強化策といたしまして、昨年5月に四日市港の霞ヶ浦北ふ頭コンテナターミナル隣地に霞北埠頭流通センター（三重県四日市市）と、昨年9月に当社グループ最大規模（倉庫面積65,207㎡）となる幸手物流センター（埼玉県幸手市）を本格稼働させ、施設の安定運営に努めました。グローバルロジスティクス事業の拡充策といたしましては、物流事情の調査のために、本年1月にハンガリー駐在員事務所を開設いたしました。

また、コーポレートガバナンス体制の強化の一環として、昨年6月に執行役員制度を導入するとともに各種会議対の見直しを実施し、取締役会の監督機能強化、経営意思決定および業務遂行の効率化・迅速化を図りました。

当期の事業の状況は、総合物流事業におきましては、倉庫業では、期中平均保管残高、貨物入庫数量ならびに物流加工の取扱量が前期に比べ増加しました。港湾運送業では、四日市港における海上コンテナの取扱量は増加し、輸入原料、雑貨につきましても全般的に増加するなど、好調に推移しました。陸上運送業では、鉄道輸送ならびにバルクコンテナ輸送の取扱量は前期に比べ減少しましたが、主力のトラック輸送の取扱量は増加しました。国際複合輸送業では、航空輸送は、取扱件数、取扱量ともに前期に比べ減少し、海上輸送の取扱量につきましては、輸出は前期に比べ減少したものの、輸入は大きく増加しました。

その他の事業におきましては、前期に引き続き、効率化や収支改善に努めてまいりました。

以上の結果、当期の連結売上高は、倉庫業、港湾運送業の取扱いが好調に推移したことなどから、前年同期比4.7%増の956億9百万円となりました。連結経常利益は、不動産の取得に伴う租税公課の計上ならびに新規拠点の稼働に伴う一時費用の増加により、前年同期比16.9%減の31億2千1百万円となり、親会社株主に帰属する当期純利益は、前期に計上しました固定資産（土地）譲渡に伴う固定資産処分益等が当期はないことから、前年同期比48.2%減の20億8千4百万円となりました。

セグメントごとの経営成績は次のとおりであります。

① 総合物流事業

総合物流事業全般の外部顧客への売上高は、945億1千3百万円と前年同期に比べ43億2千6百万円（4.8%）の増収、セグメント利益（営業利益）は22億1千8百万円と前年同期に比べ、6億3千4百万円（△22.2%）の減益となりました。

<倉庫業>

当部門におきましては、期中平均保管残高は前年同期比3.3%増の47万9千トンとなりました。期中貨物入出庫トン数につきましても、前年同期比10.4%増の775万8千トンとなり、保管貨物回転率は67.5%（前年同期63.1%）と上昇しました。

以上の結果、当部門の売上高は、前年同期比7.4%増の373億7千7百万円の計上となりました。

<港湾運送業>

当部門におきましては、四日市港における海上コンテナの取扱量は、前年同期比6.8%増の22万6千本（20フィート換算）となり、完成自動車の取扱量は、国内車は増加しましたが、輸出車は減少しました。また、輸入原料の取扱量につきましては、全般的に増加しました。

以上の結果、当部門の売上高は、前年同期比5.6%増の209億3千万円の計上となりました。

<陸上運送業>

当部門におきましては、通運貨物の取扱量は前年同期比13.1%減の24万8千トン、バルクコンテナ輸送にかかる取扱量は前年同期比7.7%減の19万2千トンとなりましたが、貨物自動車運送の取扱量は前年同期比0.8%増の724万1千トンとなりました。

以上の結果、当部門の売上高は、前年同期比3.3%増の183億9千6百万円の計上となりました。

<国際複合輸送業他>

当部門におきましては、航空輸送における輸出入の取扱量は前年同期比5.7%減の2千430トン、海上輸送における輸出の取扱量は前年同期比1.3%減の90万3千トンとなりましたが、輸入の取扱量は前年同期比12.4%増の89万7千トンとなりました。

以上の結果、当部門の売上高は、前年同期比0.2%増の178億9百万円の計上となりました。

② その他

その他の事業では、自動車整備業における車検取扱台数は前年同期比2.0%の減少となり、ゴルフ場の入場者数も前年同期比3.9%の減少となりましたが、不動産事業における完成工事売上は前年同期比147.6%の増加となりました。

以上の結果、当部門の外部顧客への売上高は、10億9千5百万円と、前年同期に比べ4千9百万円（△4.3%）の減収、セグメント利益（営業利益）は1億7千9百万円と前年同期に比べ、1千9百万円（△9.8%）の減益となりました。

(2) 財政状態の状況

総資産は前連結会計年度末に比べ83億7千9百万円増加し、1,212億1千6百万円となりました。これは主に、「有形固定資産」の増加等によるものであります。また、純資産は前連結会計年度末に比べ26億4千3百万円増加し、585億9千1百万円となりました。この結果、自己資本比率は前連結会計年度末の48.1%から46.8%となりました。

(3) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における連結ベースの現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、95億2千6百万円となり、前連結会計年度末に比べ12億1千9百万円減少しました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において、営業活動の結果増加した資金は、28億9千3百万円（前年同期比26億4千3百万円の収入減）となりました。これは主に、売上債権の増加額20億4千4百万円による減少、法人税等の支払額20億7千4百万円などがあつたものの、税金等調整前当期純利益31億2千5百万円、減価償却費33億6千4百万円の資金留保等による増加の結果であります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において、投資活動の結果減少した資金は、118億8千8百万円（前年同期比13億2千3百万円の支出増）となりました。これは主に、有形及び無形固定資産の取得による支出117億9千5百万円等による減少の結果であります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において、財務活動の結果増加した資金は、77億5百万円（前年同期比26億1千1百万円の収入増）となりました。これは主に、配当金の支払額6億4千万円、長期借入金の返済による支出12億3千7百万円等による減少と長期借入れによる収入98億円等による増加の結果であります。

なお、当連結会計年度末の連結ベースの有利子負債残高は368億1千1百万円となり、前連結会計年度末に比べて84億8百万円増加しました。

(4) 生産、受注および販売の実績

セグメント別営業概況

① 総合物流事業

最近における倉庫保管貨物入庫高並びに期末保管残高を示せば次のとおりであります。

期間	入庫高		出庫高		期末保管残高	
	屯数 (屯)	金額 (百万円)	屯数 (屯)	金額 (百万円)	屯数 (屯)	金額 (百万円)
平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで	3,895,425	1,155,133	3,862,697	1,144,724	504,854	142,237
前年同期比増減 (%)	10.9	11.4	10.0	10.8	6.9	7.9

保管貨物残高を品目別に示せば次のとおりであります。

品目	平成30年3月31日現在			
	屯数 (屯)	前年同期比増減 (%)	金額 (百万円)	前年同期比増減 (%)
農水産品	34,771	11.3	7,180	3.5
金属	9,446	5.3	2,536	14.4
金属製品・機械	47,022	15.8	18,475	3.6
窯業品	107	35.4	17	△4.5
化学工業品	215,043	8.5	72,044	16.7
紙・パルプ	6,416	0.3	4,237	3.6
繊維工業品	6,417	△2.8	3,758	△4.2
食料工業品	36,940	1.7	9,516	3.5
雑工業品	69,958	75.4	17,153	12.9
雑品	78,734	△24.2	7,322	△31.4
合計	504,854	6.9	142,236	7.9

港湾運送業の最近の貨物取扱高を示せば次のとおりであります。

期間	船内荷役 (屯)	前年同期比増減 (%)	沿岸荷役 (内 輸出貨物) (屯)	前年同期比増減 (%)
平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで	12,831,013	2.1	4,637,217 (1,425,244)	2.0 (△5.9)

貨物自動車運送業および鉄道利用運送業の最近の貨物取扱高を示せば次のとおりであります。

期間	貨物自動車運送業 (屯)	前年同期比増減 (%)	鉄道利用運送業 (屯)	前年同期比増減 (%)
平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで	7,241,615	0.8	248,268	△13.1

② その他

保険代理店の契約実績を示せば次のとおりであります。

期間	契約件数 (件)	前年同期比増減 (%)	契約保険金額 (千円)	前年同期比増減 (%)
平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで	3,743	7.1	425,710	△6.5

ゴルフ場の入場者数を示せば次のとおりであります。

期間	メンバー (人)	前年同期比増減 (%)	ビジター (人)	前年同期比増減 (%)
平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで	8,096	△9.7	23,570	△1.7

自動車整備台数を示せば次のとおりであります。

期間	車検台数 (件)	前年同期比増減 (%)
平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで	1,347	△2.0

③ 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示せば次のとおりであります。

セグメントの名称		売上高 (百万円)	前年同期比増減 (%)
総合物流事業	倉庫業	37,377	7.4
	港湾運送業	20,930	5.6
	陸上運送業	18,396	3.3
	国際複合輸送業他	17,809	0.2
その他		1,095	△4.3
合計		95,609	4.7

(注) 1 セグメント間取引については、相殺消去しております。

2 主な相手先別の販売実績および当該販売実績の総販売実績に対する割合

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	売上高 (百万円)	割合 (%)	売上高 (百万円)	割合 (%)
イオングローバルSCM株式会社	—	—	9,634	10.1

(注) 前連結会計年度については、当該割合が100分の10未満のため記載を省略しております。

3 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識および分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 重要な会計方針および見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成しております。この連結財務諸表の作成に係る会計方針および見積りについては、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。

(2) 今期の経営成績の分析

当社グループの当連結会計年度の経営成績は、倉庫業、港湾運送業の取扱いが好調に推移したことなどから、売上高は前年同期に比べ増加となりました。また、経常利益は、不動産の取得に伴う租税公課の計上ならびに新規拠点の稼働に伴う一時費用の増加により、前年同期に比べ減少し、親会社株主に帰属する当期純利益は、前期に計上しました固定資産（土地）譲渡に伴う固定資産処分益等が当期はないことから、前年同期に比べ減少となりました。

(3) 経営成績に重要な影響を与える要因および今後の方針について

当社グループを取り巻く経営環境は、世界経済の拡大基調が継続するなかで、輸出入は堅調に推移することが予想されますが、運転手をはじめとする物流業界の人手不足の深刻化や労働条件改善への対応など、景気拡大を抑制する懸念材料があることから、物流を取り巻く環境は、今後も引き続き厳しい状況が続くものと思われま。このような状況のもと、当社グループでは、様々な事業環境の変化に対応するため、「中期経営計画」に基づき、様々な施策を実施してまいります。なお、各主要課題の具体的内容につきましては、1「経営方針、経営環境及び対処すべき課題」に記載しております。

(4) 経営戦略と今後の見通しについて

当社グループでは、事業における更なる成長と企業の持続的発展を目指すため、平成29年度を初年度とする「中期経営計画」を策定し、経営の基本としております。最終年度である平成31年度における数値目標、「連結売上高1,100億円以上、連結経常利益55億円」の達成のため、各経営戦略に全力で取り組んでまいります。

(5) 資本の財源および資金の流動性についての分析

当社グループの資金調達、安定的な資金調達と調達コスト抑制を両立させ、自己資本比率、資産構成および営業キャッシュフローの各種指標に配慮して財務リスクを最小化することを基本方針としております。資金調達の手段はその時々々の市場環境を考慮したうえで、当社グループにとって最善の手段を選択しています。また、流動性マネジメントの一環として、キャッシュマネジメントシステムを国内で導入し、グループ内の企業相互間の余剰資金を集中管理することで資金の効率化を推進しています。

(参考) キャッシュ・フロー関連指標の推移

	平成26年 3月期	平成27年 3月期	平成28年 3月期	平成29年 3月期	平成30年 3月期
自己資本比率 (%)	46.1	48.5	50.6	48.1	46.8
時価ベースの自己資本比率 (%)	21.4	23.8	24.7	26.4	24.9
キャッシュ・フロー対有利子負債比率 (年)	4.4	6.2	4.3	5.1	12.7
インタレスト・カバレッジ・レシオ (倍)	21.5	17.3	26.3	35.8	17.6

自己資本比率：自己資本／総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債／キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：キャッシュ・フロー／利払い

(注) 1 各指標は、いずれも連結ベースの財務数値により算出しております。

2 株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数（自己株式控除後）により算出しております。

3 キャッシュ・フローは、連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。

4 有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている借入金等を対象としております。また、利払いについては、連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度における設備投資は、倉庫建物の建設・改修に63億3百万円、機械および装置に12億円、車両運搬具に6億3千7百万円、ソフトウェアに3億2千4百万円など、総額89億2千8百万円となりました。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の 内容	帳簿価額（百万円）							従業員数 (名)
			建物及び 構築物	機械装置	車両 運搬具	土地 (面積㎡)	有形 リース 資産	その他	合計	
中部支社 (三重県四日市市)	総合物流事業	倉庫、港湾荷 役機器	6,059	680	246	11,301 (367,573)	7	213	18,509	544 (232)
東京支店東松山営業所 (埼玉県東松山市)	総合物流事業	倉庫設備	1,760	100	0	1,916 (44,414)	-	35	3,812	46 (52)
東京支店幸手営業所 (埼玉県幸手市)	総合物流事業	倉庫設備	10,746	760	-	1,728 (55,700)	1	69	13,306	28 (18)
東京支店大和営業所 (神奈川県大和市)	総合物流事業	倉庫設備	545	59	0	4,125 (34,515)	-	11	4,741	60 (40)
名古屋支店南営業所 (名古屋市中川区・港 区)	総合物流事業	倉庫設備	53	2	6	864 (8,222)	-	2	929	16 (8)
名古屋支店西春営業所 (愛知県北名古屋市)	総合物流事業	倉庫設備	49	0	0	934 (13,198)	-	3	987	17 (22)
大阪支店泉大津営業所 (大阪府泉大津市)	総合物流事業	倉庫設備	120	5	0	1,477 (17,903)	-	1	1,605	25 (10)
大阪支店枚方営業所 (大阪府枚方市)	総合物流事業	倉庫設備	2,861	40	-	1,830 (20,946)	-	28	4,760	31 (50)
鹿島支店 (茨城県神栖市)	総合物流事業	倉庫設備	549	5	0	852 (78,205)	-	13	1,420	68 (18)

- (注) 1 中部支社には、三重県鈴鹿市の土地9,331㎡、三重郡川越町の土地40,263㎡、三重県亀山市の土地58,114㎡、愛知県海部郡飛島村の土地18,120㎡および建物、三重県松阪市の建物等を含んでおります。
- 2 上記のほか、四日市地区には、四日市港国際物流センター(株)とオペレーティングリース契約を結んだ38,186㎡の倉庫施設があり、その年間リース料は、302百万円、契約期間(残り)1~3ヵ年、リース契約残高は866百万円であります。
- 3 土地の帳簿価額は「土地の再評価に関する法律」(平成14年3月31日実施)に基づく事業用土地の再評価実施後の価額であります。
- 4 各事業所の従業員数には、連結子会社の従業員数を含んでおります。
- 5 従業員数は就業員数であり、従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人数であります。

(2) 国内子会社

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額 (百万円)						従業員数 (名)	
				建物 及び 構築物	機械装 置	車両 運搬具	土地 (面積㎡)	有形 リース 資産	その他		合計
ヨンソー開発株式会社	三重県 四日市市	その他	賃貸不動産 等	268	-	-	72 (2,926)	-	1	342	12 (0)
セントラル自動車整備株式会社	三重県 四日市市	その他	自動車整備 設備	38	9	2	-	-	8	59	19 (7)
三鈴開発株式会社	三重県 鈴鹿市	その他	ゴルフ場	104	16	2	123 (1,108,170)	11	65	323	26 (1)
極東冷蔵株式会社	三重県 四日市市	総合物流 事業	倉庫設備	173	14	15	121 (6,519)	-	20	345	27 (13)
四日市海運株式会社	三重県 四日市市	総合物流 事業	港湾荷役 機器	139	698	28	31 (2,366)	8	17	924	108 (0)
朝日海運株式会社	大阪府 泉大津市	総合物流 事業	港湾荷役 機器	54	24	13	-	-	3	95	29 (4)
中部シティフレイト株式会社他	三重県 四日市市他	総合物流 事業	車両等	2	-	161	-	83	5	253	169 (51)
トランスシティロジスティクス中部株式会社	三重県 四日市市	総合物流 事業	倉庫設備	1,000	3	22	2,796 (59,254)	29	58	3,874	55 (62)
ジェイトランス株式会社	三重県 四日市市	総合物流 事業	倉庫設備	255	67	-	1,030 (35,256)	-	14	1,367	11 (0)
霞北埠頭流通センター株式会社	三重県 四日市市	総合物流 事業	倉庫設備	6,005	402	-	-	-	25	6,434	0 (0)

- (注) 1 中部シティフレイト株式会社他とは、陸上運送業を営む九州シティフレイト(北九州市門司区)、鹿島シティフレイト株式会社(茨城県神栖市)、四倉運輸株式会社(三重県四日市市)、大阪シティフレイト株式会社(大阪市住之江区)、関東シティフレイト(埼玉県東松山市)を指します。
- 2 賃借処理している主要なリース物件としては、トランスシティロジスティクス中部株式会社の物流センター設備があり、その年間リース料は82百万円であります。
- 3 従業員数は就業人員であり、従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人数であります。

(3) 在外子会社

会社名	所在地	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額 (百万円)						従業員数 (名)	
				建物 及び 構築物	機械装 置	車両 運搬具	土地 (面積㎡)	有形 リース 資産	その他		合計
Trancy Logistics (Thailand)Co.,Ltd.	タイ国 バンコク市	総合物流 事業	倉庫設備	309	-	39	185 (42,837)	44	50	629	223

3 【設備の新設、除却等の計画】

- (1) 重要な設備の新設等
該当事項はありません。
- (2) 重要な設備の除却等
該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	240,000,000
計	240,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成30年6月28日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	67,142,417	67,142,417	名古屋証券取引所 (市場第一部) 東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は100株で あります。
計	67,142,417	67,142,417	—	—

(注) 平成29年9月26日開催の取締役会決議に基づき、平成30年4月1日をもって1単元の株式数を1,000株から100株に変更しております。

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成18年4月1日から 平成19年3月31日まで (注)	122	67,142	17	8,428	17	6,544

(注) 発行済株式総数の増加は、新株予約権の行使（旧転換社債等の権利行使を含む。）による増加であります。

(5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数1,000株）								単元未満 株式の 状況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	36	17	115	68	—	2,026	2,262	—
所有株式数 (単元)	—	27,787	370	9,852	6,317	—	22,500	66,826	316,417
所有株式数の割合 (%)	—	41.58	0.55	14.74	9.45	—	33.67	100.00	—

(注) 1 自己株式3,030,650株は「個人その他」に3,030単元、「単元未満株式の状況」に650株含まれております。

2 「その他の法人」の欄には証券保管振替機構名義の株式が1単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社	東京都中央区晴海一丁目8番11号	4,283	6.68
明治安田生命保険相互会社 (常任代理人 資産管理サービス 信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号 (東京都中央区晴海一丁目8番12号 晴海アイランドトリトンスクエアオ フィスタワーZ棟)	4,000	6.24
日本トランスシティグループ社員持 株会	三重県四日市市霞二丁目1番地の1	3,721	5.81
蒼栄会	三重県四日市市霞二丁目1番地の1	3,326	5.19
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目2番1号	3,014	4.70
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	2,843	4.44
株式会社百五銀行	三重県津市岩田21番27号	2,683	4.18
株式会社三重銀行	三重県四日市市西新地7番8号	2,668	4.16
株式会社みずほ銀行 (常任代理人 資産管理サービス 信託銀行株式会社)	東京都千代田区大手町一丁目5番5号 (東京都中央区晴海一丁目8番12号 晴海アイランドトリトンスクエアオ フィスタワーZ棟)	1,848	2.88
三菱UFJ信託銀行株式会社 (常任代理人 日本マスター トラスト信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内1丁目4番5号 (東京都港区浜松町二丁目11番3号)	1,501	2.34
計	—	29,889	46.62

- (注) 1 当社は自己株式を3,030,650株保有しておりますが、上記大株主の状況には含めておりません。
- 2 上記の所有株式数のうち、日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社の所有株式数は、信託業務に係るものであります。
- 3 「株式会社三菱東京UFJ銀行」は平成30年4月1日付で「株式会社三菱UFJ銀行」に商号変更しております。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 3,030,000	—	単元株式数は1,000株であります。
完全議決権株式(その他)	普通株式 63,796,000	63,796	単元株式数は1,000株であります。
単元未満株式	普通株式 316,417	—	—
発行済株式総数	67,142,417	—	—
総株主の議決権	—	63,796	—

(注) 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が1,000株含まれております。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数1個が含まれております。

② 【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
(自己保有株式) 日本トランスシティ株式 会社	三重県四日市市霞二丁 目1番地の1	3,030,000	—	3,030,000	4.51
計	—	3,030,000	—	3,030,000	4.51

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	8,306	3,848
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (千円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (譲渡制限付株式としての処分)	213,396	92,400	—	—
保有自己株式数	3,030,650	—	3,030,650	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りおよび買増しによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社の剰余金の配当については、安定配当を基本方針とし、今後の経営環境の変化を踏まえ、財務体質の強化にも配慮しつつ、長期的・総合的な視野に基づく配当を実施することとし、中間期末日および期末日を基準とした年2回の配当を実施する方針であります。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

この方針のもとに、当期の利益配当金は、期末配当金を1株につき5円とし、実施済の中間配当金（1株につき5円）と合わせて、年間10円としました。

内部留保資金につきましては、今後の事業展開と経営体質の強化のために有効に投資してまいりたいと考えております。

なお、当社は中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、次のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額（円）
平成29年11月9日 取締役会	320	5.00
平成30年6月28日 定時株主総会	320	5.00

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第100期	第101期	第102期	第103期	第104期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高（円）	397	400	506	510	516
最低（円）	278	298	310	316	400

(注) 株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高（円）	500	504	497	516	492	485
最低（円）	471	454	456	473	411	416

(注) 株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員 の 状 況】

男性11名 女性0名 (役員のうち女性の比率0%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 会長		小林 長久	昭和18年11月8日生	昭和41年3月 当社入社 平成7年6月 取締役 平成11年6月 常務取締役 平成13年6月 代表取締役(現在) 平成13年6月 専務取締役 平成15年6月 取締役社長 平成17年6月 財団法人四日市港湾福利厚生協会(現 一般財団法人四日市港湾福利厚生協 会)理事長(現在) 平成23年6月 当社取締役会長(現在) 平成25年6月 株式会社百五銀行社外取締役 (現在) 平成26年6月 震北埠頭流通センター株式会社代表 取締役社長(現在) 平成26年6月 四日市港埠頭株式会社代表取締役社 長(現在) 平成29年5月 名古屋四日市国際港湾株式会社社外 取締役(現在) 平成30年1月 愛三商船株式会社代表取締役社長 (現在)	(注) 3	352
代表取締役 社長 社長執行役員	営業本部長兼 管理本部長兼 海外本部長	小川 謙	昭和23年7月29日生	昭和46年3月 当社入社 平成17年6月 取締役 平成19年6月 常務取締役 平成23年6月 代表取締役社長兼営業本部長兼管理 本部長(現在) 平成24年6月 四港サイロ株式会社代表取締役社長 (現在) 平成24年6月 四日市コンテナターミナル株式会社 代表取締役社長(現在) 平成24年6月 四日市港国際物流センター株式会社 代表取締役副社長(現在) 平成26年4月 ジェイトランス株式会社代表取締役 社長(現在) 平成29年6月 当社社長執行役員(現在) 平成29年6月 東海団地倉庫株式会社代表取締役副 社長(現在) 平成30年4月 当社海外本部長(現在)	(注) 3	151
取締役 専務執行役員	営業本部副本 部長兼海外本 部副本部長兼 中部支社長、 第二営業推進 室・海外事業 統括室担当	平野 理	昭和26年9月16日生	昭和50年4月 当社入社 平成13年6月 中部支社輸入原料部長 平成17年6月 中部支社貨物流通部長 平成19年6月 人事部長 平成21年6月 取締役 平成23年6月 常務取締役運輸事業部長 平成27年6月 専務取締役 平成27年6月 営業本部副本部長兼中部支社長 (現在) 平成27年6月 中部コールセンター株式会社代表取 締役社長(現在) 平成27年6月 Trancy Logistics America Corporation代表取締役(現在) 平成27年6月 Trancy Logistics Mexico S.A. de C.V.代表取締役(現在) 平成28年7月 当社第二営業推進室担当(現在) 平成29年6月 取締役 専務執行役員(現在) 平成29年6月 海外事業統括室担当(現在) 平成30年4月 当社海外本部副本部長(現在)	(注) 3	105

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 専務執行役員	管理本部副本部長兼海外本部副本部長	横山 修一	昭和27年7月12日生	昭和50年4月 当社入社 平成13年6月 情報システム部長 平成16年7月 関東支社東京支店長 平成23年6月 取締役人事部長、グループ勤労部・情報システム部担当 平成25年6月 常務取締役人事部長、経理部担当 平成27年6月 専務取締役 平成27年6月 管理本部副本部長(現在) 平成27年6月 海外事業統括室担当 平成29年6月 取締役 専務執行役員(現在) 平成29年6月 三鈴開発株式会社代表取締役社長(現在) 平成30年4月 当社海外本部副本部長(現在)	(注) 3	82
取締役		豊田 長康	昭和25年6月21日生	昭和53年12月 三重大学医学部付属病院助手 平成3年12月 同大学医学部教授 平成14年2月 同大学学長補佐 平成16年4月 国立大学法人三重大学学長 平成21年4月 学校法人鈴鹿医療科学大学副学長 平成22年4月 独立行政法人国立大学財務・経営センター理事長 平成25年4月 学校法人鈴鹿医療科学大学学長(現在) 平成27年6月 当社取締役(現在)	(注) 3	—
取締役		武内 彦司	昭和30年2月15日生	昭和52年4月 四日市市役所入所 平成19年4月 同所経営企画部長 平成21年4月 同所財政経営部長 平成22年10月 四日市市副市長 平成26年10月 四日市市副市長退任 平成27年4月 社会福祉法人川島福祉会西浦保育園長(現在) 平成27年6月 当社取締役(現在)	(注) 3	—
監査役 (常勤)		伊藤 久弥	昭和35年4月21日生	昭和58年4月 当社入社 平成21年7月 秘書室付参与、社団法人中部経済連合会派遣 平成22年7月 四日市ポートサービス株式会社出向、同社常務取締役 平成25年6月 当社秘書室長 平成28年6月 監査役(常勤)(現在) 平成30年3月 株式会社トーア紡コーポレーション社外監査役(現在)	(注) 4	17
監査役 (常勤)		舟橋 央光	昭和31年12月9日生	昭和55年4月 株式会社三菱銀行(現 株式会社三菱UFJ銀行)入行 平成14年2月 同行名古屋駅前支社長 平成21年10月 同行退職 平成21年11月 三菱UFJ住宅ローン保証株式会社常務取締役 平成25年3月 同社退職 平成25年4月 千歳興産株式会社常務取締役 平成25年4月 千歳ファミリーーズ株式会社代表取締役専務取締役 平成29年5月 千歳興産株式会社常務取締役辞任 平成29年5月 千歳ファミリーーズ株式会社代表取締役専務取締役辞任 平成29年6月 当社監査役(常勤)(現在)	(注) 5	0
監査役		綿貫 繁夫	昭和3年7月5日生	昭和32年4月 検察官検事任官 昭和39年8月 検察官検事退官 昭和39年9月 弁護士登録(東京弁護士会) 昭和43年4月 弁護士事務所開業(現在) 平成20年6月 当社監査役(現在)	(注) 4	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
監査役		永田 昭夫	昭和23年9月15日生	昭和48年2月 昭和51年3月 昭和63年8月 平成19年8月 平成23年6月 平成23年7月 平成24年6月 平成27年5月 平成27年6月	(旧)監査法人東海第一監査事務所入所 公認会計士登録 (旧)中央新光監査法人代表社員 あずさ監査法人(現 有限責任 あずさ監査法人)代表社員 同監査法人退所 公認会計士事務所開業(現在) 当社監査役(現在) パレモ・ホールディングス株式会社 社外取締役(現在) 竹田印刷株式会社社外監査役(現在)	(注) 4	—
監査役		油家 正	昭和23年3月5日生	昭和46年12月 平成15年6月 平成17年4月 平成19年3月 平成19年4月 平成26年7月 平成28年3月 平成28年6月	三重県庁入庁 三重県地域振興部理事 株式会社サイバーウェイブジャパン 取締役社長 三重県環境森林部長 三重県庁退庁 財団法人三重県環境保全事業団(現 一般財団法人三重県環境保全事業団) 理事長 同事業団相談役 同事業団相談役退任 当社監査役(現在)	(注) 4	—
計							710

- (注) 1 取締役豊田長康、武内彦司の両氏は、社外取締役であります。
- 2 監査役舟橋央光、綿貫繁夫、永田昭夫および油家正の4氏は、社外監査役であります。
- 3 取締役の任期は、平成29年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成31年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 4 監査役伊藤久弥、綿貫繁夫、永田昭夫および油家正の4氏の任期は、平成28年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成32年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 5 監査役舟橋央光氏の任期は、平成29年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成33年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 6 当社では、執行役員制度を導入しております。

上記に記載した以外の執行役員は9名で、次のとおり構成されております。

常務執行役員	運輸事業部長兼運輸事業部中部運輸部長	山下 潤
常務執行役員	中国事業担当(上海駐在)	岡村 光喜
常務執行役員	関西支社長	安藤 仁
常務執行役員	S C M事業部長、営業開発室担当	小森 信弥
常務執行役員	中部地区労務担当	後藤 孝富
	(四日市海運株式会社 取締役社長、 四日市物流サービス株式会社 取締役社長、 四日市ポートサービス株式会社 取締役社長、 ワイケイ物流サービス株式会社 取締役社長)	
執行役員	グループ事務統括部長、情報システム部担当	小菅 能正
執行役員	運輸事業部鹿島支店長兼運輸事業部東日本運輸部長	森 恒夫
執行役員	総務部長	伊藤 豊久
執行役員	関東支社長兼第一営業推進室長	半田 一久

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

(コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方)

当社グループは、創業以来「事業を通じて社会に貢献する」を使命とし、株主、顧客・取引先、従業員、社会等のすべてのステークホルダーの信頼と期待に応えるとともに、経営の効率化・透明性を高め、企業価値の向上と持続的な成長を実現するため、コーポレートガバナンスの充実と強化を行います。

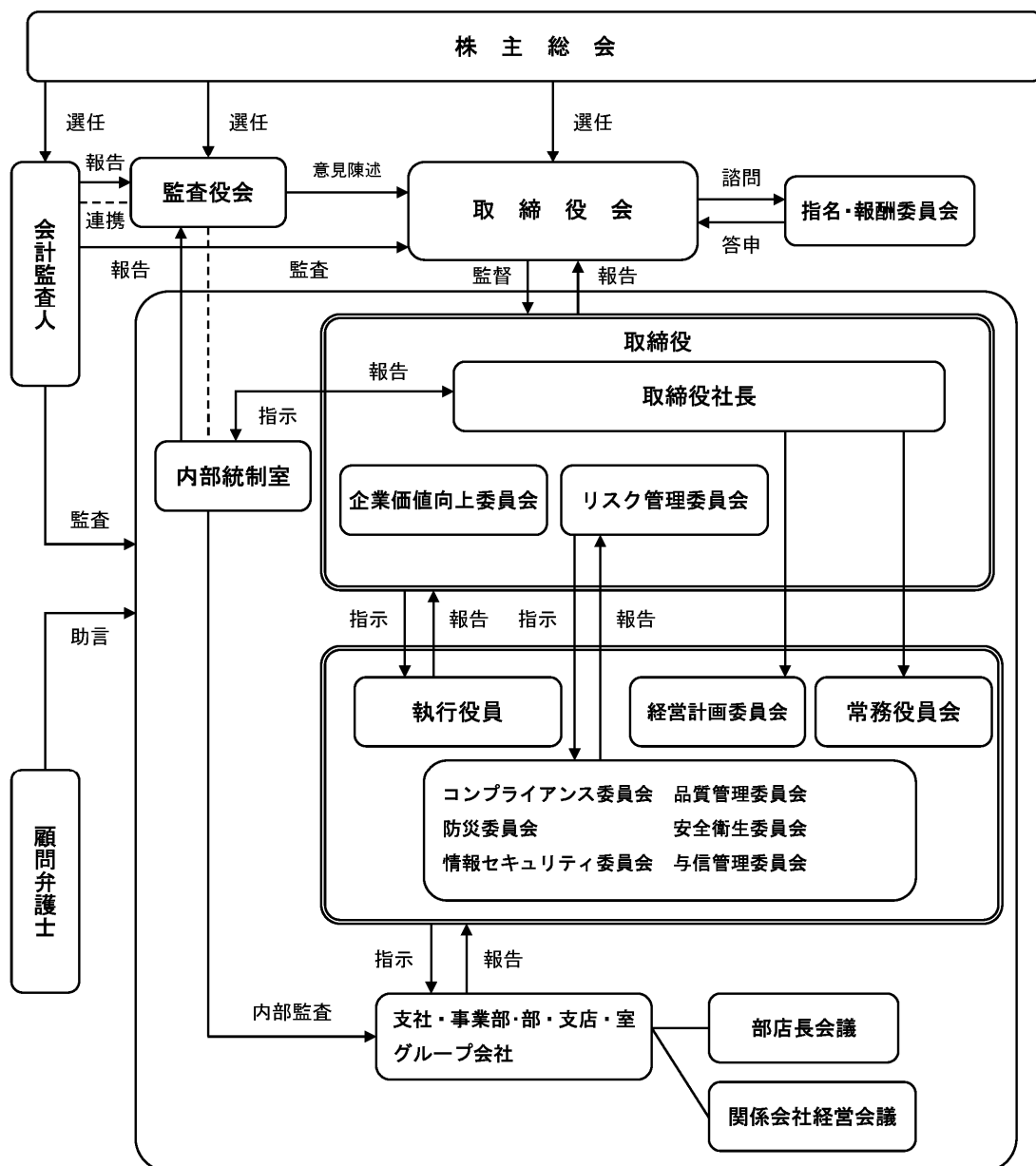
当社は監査役設置会社を選択し、取締役会において、経営の重要な意思決定および業務執行の監督を行うとともに、取締役会から独立した監査役および監査役会により職務執行状況等の監査を実施いたします。また、経営の透明性、的確性を確保するため、取締役会の任意の機関として、取締役候補者の指名ならびに取締役の報酬に関する事項について検討する指名・報酬委員会を設置しております。

当社は、会社法第427条第1項に基づき、社外取締役および社外監査役との間において、会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役および社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

(コーポレート・ガバナンスに関する施策の実施状況)

① 会社の機関の内容

【コーポレート・ガバナンス体制】



イ) 監査役設置会社

・当社は監査役設置会社であり、経営に関する機関として、株主総会、取締役会、監査役会のほか、常務役員会や経営計画委員会などを設置しております。

ロ) 取締役会および監査役会について

・取締役会は、提出日現在、社外取締役2名を含む取締役6名で構成され、月1回の定期開催と必要に応じた臨時開催により、迅速かつ適正な意思決定を行っており、また、監査役5名は常時出席して意見陳述を行っております。

・経営の監督機能と業務執行を分離し、権限と責任を明確にするために執行役員制度を導入し、執行役員を選任しております。

・監査役会は、提出日現在、5名（うち、社外監査役4名）で構成され、原則として月1回開催しております。監査役は重要会議（常務役員会、経営計画委員会、部長会議など）に出席して意見陳述を行い、取締役の業務執行を常に監査しております。監査役は常勤監査役2名ならびに非常勤監査役3名の5名体制により、稟議事項の監査を含め、取締役および使用人の業務執行を常に監査しております。また、代表取締役、内部統制室、会計監査人との間で適宜、情報交換や意見交換を行い、問題点の指摘や是正を図っております。

・当社は、外部からの客観的・中立的な経営監督機能が重要であると考え、独立性を有する社外取締役2名、社外監査役4名を選任しております。また、社外監査役4名のうち1名は常勤監査役として日々経営監視にあたっております。従いまして、当社の現時点での経営の体制につきましては、経営監視機能が有効に働く体制が整っており、客観性や中立性が十分確保されていると判断しているため、現状の体制を採用しております。

ハ) 各種委員会の概要

・独立社外取締役からの適切な助言を得るため、取締役会の諮問委員会として社外取締役を構成員に含む指名・報酬委員会を設置し、取締役候補の指名ならびに取締役の報酬に関する事項を審議し、取締役会に答申しております。

・常務役員会を原則として、月2回開催し、経営に関する重要事項および関係会社における重要事項を主な付議事項とし、協議しております。

・経営計画委員会を原則として、月2回開催し、中期経営計画を推進する上で重要な課題について協議しております。

・部長会議を月1回開催し、経営意思決定の即時伝達や各部店の営業報告等を行い、情報の共有化を図っております。

・関係会社経営会議を定期的で開催し、連結経営体制の強化を図っております。

ニ) 会計監査人等その他第三者の状況

・会計監査人から財務報告に係る内部統制および決算書類等の監査を受け、また、定期的に監査報告会を開催して、財務報告の信頼性確保に努めております。

ホ) 内部統制システムの整備の状況および子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

・当社は、取締役会を頂点とする各種委員会ならびに監査役会により内部統制システムを構築するとともに、社長直轄組織である内部統制室を中心に業務執行の適正化、内部監査機能の強化を図り、法令の遵守はもとより業務の有効性と効率性の確保に努めております。

・子会社の業務に関しては、「関係会社管理規程」に基づき、決議事項および当社への報告事項を定め、当社の各種機関での協議・承認を行う体制を整備しております。また、関係会社経営会議を開催し、事業運営に関する重要事項や経営課題等について、報告・説明を受けるとともに、意見交換・情報交換を行う体制を整備しております。

ヘ) 内部監査および監査役監査の状況

・当社では、提出日現在、監査役5名（社外監査役4名を含む）による監査や重要会議での意思陳述に加え、監査実施状況とその結果について、社長との意見交換会を適宜行っております。

また、ホ)の記載のとおり、社長直轄組織である内部統制室が設置されており、同室は社長に対する業務監査報告を適宜行っております。

なお、当社の監査役のうち、財務および会計に関して知見を有する監査役につきましては、次のとおりであります。

舟橋 央光	常勤	他社において、長年にわたり財務・経理業務に関与した経験を有している。
綿貫 繁夫	非常勤	税理士の資格を有し、財務および会計に関する専門的知識を有している。
永田 昭夫	非常勤	公認会計士として、財務および会計に関する専門的知識を有している。

(注) 監査役舟橋央光、綿貫繁夫および永田昭夫の3氏は社外監査役であります。

ト) 会計監査の状況

・当社は、有限責任 あずさ監査法人と監査契約を結び、決算書類等の監査を受けております。監査役、内部統制室、会計監査人は相互の連携を密にするため、情報交換や意見交換を定期的に行っております。

当期において、会計監査業務を執行した公認会計士は次のとおりであります。

業務を執行した公認会計士の氏名	指定有限責任社員 業務執行社員 山川 勝 (有限責任 あずさ監査法人)
	指定有限責任社員 業務執行社員 新家 徳子 (有限責任 あずさ監査法人)
監査業務に係る補助者の構成	公認会計士 9名
	その他 7名

チ) 社外取締役および社外監査役との関係

- ・社外取締役豊田長康氏は、当社と人的関係、資本的関係または特別な取引関係その他の利害関係はありません。
- ・社外取締役武内彦司氏は、当社と人的関係、資本的関係または特別な取引関係その他の利害関係はありません。
- ・社外監査役舟橋央光氏は、過去に当社の主要な取引銀行である株式会社三菱銀行（現 株式会社三菱UFJ銀行）の業務執行者でありましたが、退職後8年以上経過しており、当社の意思決定に与える影響も無いことから、同氏は当社と人的関係、資本的関係または特別な取引関係その他の利害関係はありません。
- ・社外監査役綿貫繁夫氏は、当社と人的関係、資本的関係または特別な取引関係その他の利害関係はありません。
- ・社外監査役永田昭夫氏は、平成23年6月まで当社の会計監査人であるあずさ監査法人（現 有限責任 あずさ監査法人）の代表社員でありましたが、同監査法人は当社から独立した立場で当社の会計監査を実施しており、また、当社の同監査法人に対する報酬額についても同監査法人の規模に比して少額であり、当社の意思決定に与える影響も無いことから、同氏は当社と人的関係、資本的関係または特別な取引関係その他の利害関係はありません。
- ・社外監査役油家正氏は、過去に当社の取引先である財団法人三重県環境保全事業団（現一般財団法人三重県環境保全事業団）の理事長および相談役でありましたが、その取引額は僅少であり、当社の意思決定に与える影響も無いことから、同氏は当社と人的関係、資本的関係または特別な取引関係その他の利害関係はありません。
- ・社外取締役豊田長康および武内彦司ならびに社外監査役舟橋央光、綿貫繁夫、永田昭夫および油家正の6氏につきましては、客観性、中立性の観点から特に独立性が高いと判断し、独立役員として東京証券取引所および名古屋証券取引所に届出しております。

リ) 社外取締役および社外監査役の独立性に関する基準等

- ・当社は、社外取締役および社外監査役の選任にあたっては、金融商品取引所の定める独立性の要件を参考にしております。

ヌ) 社外取締役と会計監査、監査役監査および内部監査部門との連携状況

- ・社外取締役および社外監査役は、取締役会において、内部監査、監査役監査、会計監査ならびに金融商品取引法に基づく内部統制に係る評価結果、会社法に基づく内部統制の整備・運用状況の報告を受け、適宜意見を述べることで監督機能を果たすとともに、必要に応じて各部署と協議等を行っております。また、社外取締役と社外監査役は社外役員ミーティングを通じて、相互に意見交換を行っております。

② リスク管理体制の整備状況

当社では、リスクを経営環境の変化によるリスク、規制・法令違反リスク、自然災害リスク、財務・会計リスク、海外リスク、オペレーショナルリスク、情報リスクの7種に分類し、総務部、人事部、経理部、経営企画部等、リスク毎にそれぞれの担当部署を定め、また必要に応じ委員会を設置するなど個々に対応しておりますが、これらの委員会を包括的に管理・統括する「リスク管理委員会」を設置しております。特にオペレーショナルリスクについては、品質管理委員会を機関として設置し、物流品質の向上に努めております。さらに当社グループの経営資源が集中する中部地区において、大規模地震の発生が懸念されているため、防災計画および地震発生時初動マニュアルを策定し、災害訓練など、社内への啓蒙活動を行っております。

③ 役員報酬の内容

イ) 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額および対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)				対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	株式報酬	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く)	152	136	15	—	—	13
監査役 (社外監査役を除く)	18	18	—	—	—	1
社外役員	38	38	—	—	—	7

(注) 1 取締役の報酬等の総額には、使用人兼務取締役の使用人給与は含まれておりません。

2 上記には、平成29年6月29日開催の第103回定時株主総会終結の時をもって退任した取締役9名および監査役1名の在任中の報酬額が含まれております。

3 取締役の株式報酬額は、当事業年度に係る譲渡制限付株式報酬の費用計上額としております。

ロ) 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

・記載すべき事項はありません。

ハ) 使用人兼務役員の使用人給与のうち、重要なもの

・該当する事項が存在しないため、記載しておりません。

ニ) 役員の報酬等の額の決定に関する方針

・取締役の報酬につきましては、企業業績、中長期的な企業価値向上の貢献意欲向上等を勘案することを基本としており、当社における他の役職員の報酬等および同業界の役職員の報酬等の水準も考慮し、株主総会の決議により定められた報酬総額の限度内において決定しております。また、取締役の報酬体系は、金銭による定額報酬に加え、業績向上と企業価値向上のインセンティブに資するよう株式報酬制度を採用しております。なお、社外取締役については、定額報酬としております。

上記の取締役の報酬は、社外取締役を構成員に含む指名・報酬委員会で審議し、指名・報酬委員会は審議した内容を取締役に答申のうえ、取締役会で決定いたします。

・監査役の報酬につきましては、監査役の協議にて決定しております。

④ 取締役の定数

当社の取締役は15名以内とする旨を定款に定めておりましたが、平成29年6月29日開催の第103回定時株主総会において、7名以内とする旨の定款変更を決議しております。

⑤ 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議については累積投票によらない旨定款に定めております。

⑥ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会の特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

⑦ 自己の株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を遂行することを目的とするものであります。

⑧ 中間配当

当社は、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって中間配当を実施することができる旨定款に定めております。これは、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

⑨ 取締役および監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議によって取締役（取締役であった者を含む。）および監査役（監査役であった者を含む。）の責任を法令の限度において免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役および監査役が期待された役割を十分に発揮できるようにすることを目的とするものであります。

⑩ 株式の保有状況

イ) 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数 81銘柄

貸借対照表計上額の合計額 7,880百万円

ロ) 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額および

保有目的

(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	2,832,600,000	1,981	取引関係の維持・強化のため
東京海上ホールディングス株式会社	165,400,000	776	取引関係の維持・強化のため
セイノーホールディングス株式会社	479,000,000	598	取引関係の維持・強化のため
株式会社百五銀行	1,164,000,000	516	取引関係の維持・強化のため
日本碍子株式会社	200,000,000	504	取引関係の維持・強化のため
株式会社三菱ケミカルホールディングス	435,500,000	375	取引関係の維持・強化のため
イオン株式会社	173,760,754	282	取引関係の維持・強化のため
株式会社三重銀行	115,900,000	272	取引関係の維持・強化のため
株式会社みずほフィナンシャルグループ	1,310,500,000	267	取引関係の維持・強化のため
名港海運株式会社	219,000,000	237	取引関係の維持・強化のため
東陽倉庫株式会社	550,000,000	190	取引関係の維持・強化のため
イオンフィナンシャルサービス株式会社	71,100,000	149	取引関係の維持・強化のため
協和発酵キリン株式会社	78,000,000	137	取引関係の維持・強化のため
株式会社テクノ菱和	133,870,000	126	取引関係の維持・強化のため
株式会社名古屋銀行	17,400,000	69	取引関係の維持・強化のため
中部電力株式会社	33,100,000	49	取引関係の維持・強化のため
株式会社愛知銀行	6,700,000	41	取引関係の維持・強化のため
ラサ商事株式会社	50,000,000	35	取引関係の維持・強化のため
ニチュ三菱フォークリフト株式会社	50,000,000	35	取引関係の維持・強化のため

みなし保有株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
名港海運株式会社	281,000	304	議決権行使権限に制限を設けておりません。
新東工業株式会社	261,000	252	議決権行使権限に制限を設けておりません。
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	202,680	141	議決権行使権限に制限を設けておりません。
J S R 株式会社	72,000	135	議決権行使権限に制限を設けておりません。
東邦瓦斯株式会社	165,000	129	議決権行使権限に制限を設けておりません。
株式会社百五銀行	290,000	128	議決権行使権限に制限を設けておりません。
住友商事株式会社	82,000	122	議決権行使権限に制限を設けておりません。
株式会社岡三証券グループ	163,000	110	議決権行使権限に制限を設けておりません。
川崎汽船株式会社	315,000	93	議決権行使権限に制限を設けておりません。
井村屋グループ株式会社	50,000	88	議決権行使権限に制限を設けておりません。
美津濃株式会社	148,000	84	議決権行使権限に制限を設けておりません。

(注) 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。

(当事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	2,832,600.000	1,974	取引関係の維持・強化のため
セイノーホールディングス株式会社	479,000.000	937	取引関係の維持・強化のため
東京海上ホールディングス株式会社	165,400.000	783	取引関係の維持・強化のため
株式会社百五銀行	1,164,000.000	585	取引関係の維持・強化のため
株式会社三菱ケミカルホールディングス	435,500.000	448	取引関係の維持・強化のため
日本碍子株式会社	200,000.000	366	取引関係の維持・強化のため
イオン株式会社	178,775.235	339	取引関係の維持・強化のため
株式会社三重銀行	115,900.000	275	取引関係の維持・強化のため
名港海運株式会社	219,000.000	256	取引関係の維持・強化のため
株式会社みずほフィナンシャルグループ	1,310,500.000	250	取引関係の維持・強化のため
東陽倉庫株式会社	550,000.000	204	取引関係の維持・強化のため
協和発酵キリン株式会社	78,000.000	182	取引関係の維持・強化のため
イオンフィナンシャルサービス株式会社	71,100.000	173	取引関係の維持・強化のため
株式会社テクノ菱和	133,870.000	110	取引関係の維持・強化のため
株式会社名古屋銀行	17,400.000	68	取引関係の維持・強化のため
中部電力株式会社	33,100.000	49	取引関係の維持・強化のため
ラサ商事株式会社	50,000.000	45	取引関係の維持・強化のため
三菱ロジネクス株式会社	50,000.000	44	取引関係の維持・強化のため
株式会社山善	36,811.767	40	取引関係の維持・強化のため

みなし保有株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
名港海運株式会社	281,000	328	議決権行使権限に制限を設けておりません。
新東工業株式会社	261,000	289	議決権行使権限に制限を設けておりません。
井村屋グループ株式会社	50,000	193	議決権行使権限に制限を設けておりません。
J S R 株式会社	72,000	172	議決権行使権限に制限を設けておりません。
住友商事株式会社	82,000	146	議決権行使権限に制限を設けておりません。
株式会社百五銀行	290,000	145	議決権行使権限に制限を設けておりません。
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	202,680	141	議決権行使権限に制限を設けておりません。
東邦瓦斯株式会社	33,000	107	議決権行使権限に制限を設けておりません。
株式会社岡三証券グループ	163,000	103	議決権行使権限に制限を設けておりません。
美津濃株式会社	29,600	95	議決権行使権限に制限を設けておりません。
日本ゼオン株式会社	60,000	92	議決権行使権限に制限を設けておりません。

(注) 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。

ハ) 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	48	—	48	—
連結子会社	—	—	—	—
計	48	—	48	—

② 【その他重要な報酬の内容】

イ) 前連結会計年度

該当事項はありません。

ロ) 当連結会計年度

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

イ) 前連結会計年度

該当事項はありません。

ロ) 当連結会計年度

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社は、監査公認会計士等に対する報酬の額の決定に関する方針については定めておりませんが、監査計画の内容、会計監査の職務執行状況および報酬見積りの算出根拠等について必要な検証を行った上で決定いたしております。

第5【経理の状況】

1 連結財務諸表および財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の連結財務諸表および事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人の監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構等へ加入し、当該機構等の行う研修に参加するなどして、情報収集を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	11,267	10,286
受取手形及び営業未収金	13,013	※4 14,969
たな卸資産	101	88
繰延税金資産	184	368
その他	2,487	3,288
貸倒引当金	△16	△27
流動資産合計	27,037	28,973
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	※6 16,124	※3,※6 32,526
機械装置及び運搬具（純額）	2,472	4,173
土地	※3,※5 32,527	※5,※6 32,419
建設仮勘定	12,660	173
その他（純額）	1,089	1,095
有形固定資産合計	※1 64,875	※1 70,389
無形固定資産	1,421	1,417
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 14,555	※2 15,439
繰延税金資産	577	591
退職給付に係る資産	3,089	3,494
その他	1,302	928
貸倒引当金	△22	△18
投資その他の資産合計	19,503	20,436
固定資産合計	85,800	92,243
資産合計	112,837	121,216

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び営業未払金	8,406	※4 8,906
短期借入金	2,390	2,360
1年内返済予定の長期借入金	799	4,757
未払法人税等	1,212	217
繰延税金負債	182	—
賞与引当金	1,051	1,073
その他	6,889	※3 3,367
流動負債合計	20,932	20,683
固定負債		
長期借入金	24,797	29,402
繰延税金負債	2,277	2,925
再評価に係る繰延税金負債	※5 3,774	※5 3,772
退職給付に係る負債	1,910	1,980
長期預り保証金	※3 2,824	2,655
その他	373	※3 1,204
固定負債合計	35,957	41,941
負債合計	56,889	62,625
純資産の部		
株主資本		
資本金	8,428	8,428
資本剰余金	6,752	6,763
利益剰余金	38,846	40,341
自己株式	△1,269	△1,189
株主資本合計	52,758	54,343
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	2,325	2,743
土地再評価差額金	※5 △1,181	※5 △1,183
為替換算調整勘定	255	234
退職給付に係る調整累計額	74	546
その他の包括利益累計額合計	1,472	2,340
非支配株主持分	1,716	1,907
純資産合計	55,948	58,591
負債純資産合計	112,837	121,216

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	91,332	95,609
売上原価	※2 82,404	※2 87,154
売上総利益	8,928	8,454
販売費及び一般管理費	※1, ※2 5,948	※1, ※2 6,109
営業利益	2,979	2,345
営業外収益		
受取利息	22	25
受取配当金	377	377
持分法による投資利益	397	494
その他	161	122
営業外収益合計	958	1,020
営業外費用		
支払利息	155	171
為替差損	—	43
その他	※2 25	※2 29
営業外費用合計	180	243
経常利益	3,757	3,121
特別利益		
固定資産処分益	※3 2,035	※3 60
投資有価証券売却益	86	—
補助金収入	—	184
その他	114	—
特別利益合計	2,235	244
特別損失		
固定資産処分損	※4 35	※4 90
減損損失	—	※5 50
固定資産圧縮損	—	100
特別損失合計	35	241
税金等調整前当期純利益	5,957	3,125
法人税、住民税及び事業税	1,836	1,029
法人税等調整額	△63	△123
法人税等合計	1,773	905
当期純利益	4,184	2,219
非支配株主に帰属する当期純利益	163	134
親会社株主に帰属する当期純利益	4,021	2,084

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益	4,184	2,219
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	923	423
為替換算調整勘定	△90	46
退職給付に係る調整額	693	472
持分法適用会社に対する持分相当額	△8	10
その他の包括利益合計	※1 1,518	※1 953
包括利益	5,703	3,172
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	5,552	2,978
非支配株主に係る包括利益	151	194

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	8,428	6,750	35,324	△1,198	49,305
当期変動額					
剰余金の配当			△672		△672
親会社株主に帰属する 当期純利益			4,021		4,021
連結範囲の変動					—
自己株式の取得				△71	△71
自己株式の処分					—
連結子会社株式の 取得による持分の増減		1			1
土地再評価差額金の取崩			173		173
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	1	3,522	△71	3,452
当期末残高	8,428	6,752	38,846	△1,269	52,758

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	為替換算 調整勘定	退職給付に 係る調整 累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	1,410	△1,008	331	△619	113	1,573	50,992
当期変動額							
剰余金の配当							△672
親会社株主に帰属する 当期純利益							4,021
連結範囲の変動							—
自己株式の取得							△71
自己株式の処分							—
連結子会社株式の 取得による持分の増減							1
土地再評価差額金の取崩							173
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	915	△173	△76	694	1,359	143	1,502
当期変動額合計	915	△173	△76	694	1,359	143	4,955
当期末残高	2,325	△1,181	255	74	1,472	1,716	55,948

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	8,428	6,752	38,846	△1,269	52,758
当期変動額					
剰余金の配当			△640		△640
親会社株主に帰属する 当期純利益			2,084		2,084
連結範囲の変動			48		48
自己株式の取得				△3	△3
自己株式の処分		8		83	92
連結子会社株式の 取得による持分の増減		2			2
土地再評価差額金の取崩			1		1
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	10	1,494	79	1,585
当期末残高	8,428	6,763	40,341	△1,189	54,343

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	為替換算 調整勘定	退職給付に 係る調整 累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	2,325	△1,181	255	74	1,472	1,716	55,948
当期変動額							
剰余金の配当							△640
親会社株主に帰属する 当期純利益							2,084
連結範囲の変動							48
自己株式の取得							△3
自己株式の処分							92
連結子会社株式の 取得による持分の増減							2
土地再評価差額金の取崩							1
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	417	△1	△20	472	867	190	1,058
当期変動額合計	417	△1	△20	472	867	190	2,643
当期末残高	2,743	△1,183	234	546	2,340	1,907	58,591

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	5,957	3,125
減価償却費	2,638	3,364
減損損失	—	50
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	122	133
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)	273	207
固定資産処分損益 (△は益)	△2,019	△48
固定資産圧縮損	—	100
受取利息及び受取配当金	△400	△402
支払利息	155	171
売上債権の増減額 (△は増加)	368	△2,044
仕入債務の増減額 (△は減少)	304	618
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△13	12
未払消費税等の増減額 (△は減少)	△1,048	△387
その他	114	△423
小計	6,451	4,477
利息及び配当金の受取額	628	654
利息の支払額	△154	△164
法人税等の支払額	△1,388	△2,074
営業活動によるキャッシュ・フロー	5,537	2,893
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△160	△204
定期預金の払戻による収入	4	5
有形及び無形固定資産の取得による支出	△14,282	△11,795
有形及び無形固定資産の売却による収入	2,362	77
投資有価証券の取得による支出	△39	△52
投資有価証券の売却による収入	1,379	—
その他	170	80
投資活動によるキャッシュ・フロー	△10,565	△11,888
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△52	△33
長期借入れによる収入	8,000	9,800
長期借入金の返済による支出	△1,842	△1,237
自己株式の取得による支出	△71	△3
配当金の支払額	△672	△640
その他	△267	△179
財務活動によるキャッシュ・フロー	5,094	7,705
現金及び現金同等物に係る換算差額	20	△24
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	86	△1,314
現金及び現金同等物の期首残高	10,659	10,746
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	—	94
現金及び現金同等物の期末残高	※1 10,746	※1 9,526

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(イ) 連結子会社の数 33社

主要な連結子会社名は「第1企業の概況」の4 関係会社の状況に記載しているため省略しております。

Trancy Logistics Mexico S.A. de C.V.は、重要性が増したため、連結の範囲に含めております。

(ロ) 主要な非連結子会社は次のとおりであります。

四日市 SHIPPING株式会社

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社11社は、いずれも小規模会社であり、合計の総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)および利益剰余金(持分に見合う額)等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2 持分法の適用に関する事項

(イ) 持分法を適用した非連結子会社の数 1社

持分法を適用した非連結子会社は次のとおりであります。

南大阪埠頭株式会社

(ロ) 持分法を適用した関連会社の数 8社

持分法適用関連会社名は、「第1企業の概況」の4 関係会社の状況に記載しているため省略しております。

(ハ) 持分法を適用しない非連結子会社および関連会社のうち主要な会社等の名称

主要な非連結子会社

四日市 SHIPPING株式会社

主要な関連会社

多度開発株式会社

(持分法を適用しない理由)

持分法非適用会社は、それぞれ当期純損益(持分に見合う額)および利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

(ニ) 持分法の適用の手続について特に記載する必要があると認められる事項

持分法適用会社のうち、決算日が連結決算日と異なる会社については、当該会社の事業年度に係る財務諸表を使用しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、Trancy Logistics America Corporationほか海外連結子会社7社の決算日は12月31日であり、連結決算日との差は3ヵ月以内であるため、当該連結子会社の決算日現在の財務諸表を基礎として連結を行っております。

ただし、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4 会計方針に関する事項

(イ) 重要な資産の評価基準および評価方法

① 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

② たな卸資産

移動平均法による原価法

(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(ロ) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産 (リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、耐用年数については、主として法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

ただし、建物の一部については経済的な実情を勘案し、自主的耐用年数 (主として20年) を採用しております。

② 無形固定資産 (リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

また、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間 (5年) に基づく定額法を採用しております。

③ リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、一部の連結子会社において、自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零 (残価保証の取決めがある場合は残価保証額) とする定額法を採用しております。

なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年3月31日以前のものについては、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

(ハ) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(ニ) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異、過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数 (10年) による定額法により発生年度から費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数 (10年) による定額法によりそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

③ 簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債および退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(ホ) 重要な外貨建の資産または負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

なお、在外連結子会社等の資産および負債は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益および費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定および非支配株主持分に計上しております。

(ヘ) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

特殊処理の要件を満たしている金利スワップ取引は特例処理を行っております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段	ヘッジ対象
金利スワップ	借入金

③ ヘッジ方針

市場金利変動によるリスクを回避するのが目的で行われる金利スワップ取引については取引の実行管理を当社の経理部門で行い、リスク管理に対しては稟議等による規制管理を行っております。

(ト) のれんの償却方法および償却期間

5年間で均等償却しております。ただし、僅少な場合は、当該勘定が生じた連結会計年度の損益として処理しております。

(チ) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金および容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヵ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(リ) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日)

「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日)

(1) 概要

国際会計基準審議会 (IASB) および米国財務会計基準審議会 (FASB) は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は平成30年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、ます。

(連結貸借対照表関係)

※1 減価償却累計額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
有形固定資産の減価償却累計額	55,270百万円	57,386百万円

※2 非連結子会社および関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券(株式)	6,452百万円	6,698百万円

※3 担保資産および担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
建物	-百万円	5,700百万円

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
未払金	-百万円	52百万円
長期未払金	-百万円	894百万円
計	-百万円	947百万円

なお、上記のほか、前連結会計年度において、長期預り保証金40百万円について、土地795百万円の担保設定予約があります。

※4 期末日満期手形

期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、当連結会計年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が期末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
受取手形	-百万円	53百万円
支払手形	-百万円	24百万円

※5 土地の再評価

当社は、土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)および土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律(平成11年3月31日公布法律第24号、平成13年3月31日公布法律第19号)に基づき、事業用土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

・再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第3号に定める固定資産税評価額に合理的な調整を行って算出する方法によっております。

・再評価を行った年月日 平成14年3月31日

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
再評価を行った土地の期末における時価と再評価後の帳簿価額との差額 (時価が帳簿価額を下回る金額)	9,033百万円	8,931百万円

※6 国庫補助金等による固定資産圧縮記帳額

国庫補助金等により有形固定資産の取得価額から控除している圧縮記帳額およびその内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
建物	99百万円	99百万円
土地	-百万円	100百万円

7 保証債務

以下の会社の金融機関からの借入金について下記金額の保証予約を行っております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
四日市コンテナターミナル株式会社	199百万円	四日市コンテナターミナル株式会社 172百万円

(連結損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費の主要な費目と金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
報酬及び給料手当	2,468百万円	2,626百万円
減価償却費	448百万円	400百万円
賞与引当金繰入額	234百万円	243百万円
退職給付費用	229百万円	221百万円

※2 引当金繰入額

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
賞与引当金繰入額	1,051百万円	1,073百万円
貸倒引当金繰入額	9百万円	8百万円

※3 固定資産処分益の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物及び構築物	一百万円	11百万円
機械装置及び運搬具	70百万円	36百万円
土地	1,964百万円	11百万円
その他の有形固定資産	0百万円	0百万円
計	2,035百万円	60百万円

※4 固定資産処分損の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物及び構築物	28百万円	82百万円
機械装置及び運搬具	2百万円	0百万円
その他の有形固定資産	3百万円	6百万円
無形固定資産	1百万円	0百万円
計	35百万円	90百万円

※5 減損損失

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

場所	用途	種類	減損損失の金額
三重県四日市市	遊休資産	建物及び構築物	44百万円
		土地	6百万円
		その他	0百万円

減損損失の算定にあたっては、他の資産または資産グループのキャッシュ・フローから概ね独立したキャッシュ・フローを生み出す最少の単位として、主として支社事業区分別および遊休施設による資産のグルーピングを行っております。

本社移転により本社社屋等が遊休資産となったため、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

なお、回収可能価額は正味売却価額とし、建物及び構築物およびその他については零、土地については、固定資産税評価額から処分費用見込額を控除した額により合理的に算定しております。

(連結包括利益計算書関係)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額および税効果額

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	1,420百万円	613百万円
組替調整額	△86百万円	－百万円
税効果調整前	1,333百万円	613百万円
税効果額	△409百万円	△189百万円
その他有価証券評価差額金	923百万円	423百万円
為替換算調整勘定		
当期発生額	△90百万円	46百万円
退職給付に係る調整額		
当期発生額	657百万円	407百万円
組替調整額	336百万円	269百万円
税効果調整前	994百万円	677百万円
税効果額	△300百万円	△204百万円
退職給付に係る調整額	693百万円	472百万円
持分法適用会社に対する持分相当額		
当期発生額	△8百万円	10百万円
その他の包括利益合計	1,518百万円	953百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自平成28年4月1日至平成29年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	67,142,417	—	—	67,142,417

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	3,031,834	203,906	—	3,235,740

(注) 自己株式の株式数増加203,906株は、平成28年8月30日開催の取締役会決議に基づく取得による増加199,000株および単元未満株式の買取りによる増加4,906株であります。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成28年6月29日 定時株主総会	普通株式	352	5.50	平成28年3月31日	平成28年6月30日
平成28年11月10日 取締役会	普通株式	319	5.00	平成28年9月30日	平成28年12月5日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	319	5.00	平成29年3月31日	平成29年6月30日

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（株）	67,142,417	—	—	67,142,417

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（株）	3,235,740	8,306	213,396	3,030,650

（注）1 自己株式の株式数増加8,306株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2 自己株式の株式数減少213,396株は、譲渡制限付株式報酬としての自己株式処分による減少であります。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	319	5.00	平成29年3月31日	平成29年6月30日
平成29年11月9日 取締役会	普通株式	320	5.00	平成29年9月30日	平成29年12月5日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成30年6月28日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	320	5.00	平成30年3月31日	平成30年6月29日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金及び預金勘定	11,267百万円	10,286百万円
預入期間が3ヵ月を超える定期預金	△520百万円	△759百万円
現金及び現金同等物	10,746百万円	9,526百万円

(リース取引関係)

1 リース取引開始日が平成20年3月31日以前の所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額および期末残高相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
機械装置及び運搬具	1,405	1,323	82
合計	1,405	1,323	82

(単位：百万円)

	当連結会計年度 (平成30年3月31日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
機械装置及び運搬具	—	—	—
合計	—	—	—

なお、取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、「支払利子込み法」により算定しております。

② 未経過リース料期末残高相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
1年内	82	—
1年超	—	—
合計	82	—

なお、未経過リース料期末残高相当額は、有形固定資産の期末残高等に占めるその割合が低いため、「支払利子込み法」により算定しております。

③ 支払リース料、減価償却費相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
支払リース料	117	82
減価償却費相当額	117	82

④ 減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2 ファイナンス・リース取引

所有権移転ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

有形固定資産

主として、総合物流事業における車両（機械装置及び運搬具）であります。

無形固定資産

ソフトウェアであります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 (ロ) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

有形固定資産

主として、総合物流事業における車両（機械装置及び運搬具）および情報機器（その他の有形固定資産）であります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 (ロ) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

3 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
1年内	1,120	1,174
1年超	1,168	1,323
合計	2,289	2,497

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行借入および社債発行による方針であります。デリバティブは、主に借入金の金利変動リスクの回避ならびに地震発生時の損失補填のために利用し、投機的な取引は行っておりません。

(2) 金融商品の内容およびそのリスクならびにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び営業未収金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社グループの与信管理規程等に従い、取引先ごとの期日管理および残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を半期ごとに把握する体制としております。

投資有価証券である株式は、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、定期的に時価を把握しております。

営業債務である支払手形及び営業未払金は、そのほとんどが1年以内の支払期日であります。

借入金のうち、短期借入金は主に営業取引に係る資金調達であり、長期借入金は主に設備投資に係る資金調達であります。変動金利の借入金は、金利の変動リスクに晒されておりますが、このうち長期のものの一部については、支払金利の変動リスクを回避し支払利息の固定化を図るために、個別契約ごとにデリバティブ取引（金利スワップ取引）をヘッジ手段として利用しております。ヘッジの有効性の評価方法については、金利スワップの特例処理の要件を満たしているため、その判定をもって有効性の評価を省略しております。

長期預り保証金は、主にゴルフ場の預託金であります。

デリバティブの利用にあたっては、信用リスクを軽減するために、格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

また、営業債務や借入金は、流動性リスクに晒されておりますが、当社グループでは、キャッシュマネジメントシステムにてグループ各社の資金を一元管理することにより、当該リスクの低減を図っております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません（（注）2をご参照ください）。

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	11,267	11,267	—
(2) 受取手形及び営業未収金	13,013	13,013	—
(3) 投資有価証券			
その他有価証券	7,609	7,609	—
資産計	31,889	31,889	—
(1) 支払手形及び営業未払金	8,406	8,406	—
(2) 短期借入金	2,390	2,390	—
(3) 長期借入金	25,597	25,649	51
負債計	36,394	36,446	51

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	10,286	10,286	—
(2) 受取手形及び営業未収金	14,969	14,969	—
(3) 投資有価証券 其他有価証券	8,244	8,244	—
資産計	33,499	33,499	—
(1) 支払手形及び営業未払金	8,906	8,906	—
(2) 短期借入金	2,360	2,360	—
(3) 長期借入金	34,160	34,135	△24
負債計	45,427	45,403	△24

（注）1 金融商品の時価の算定方法ならびに有価証券およびデリバティブ取引に関する事項

資産

- (1) 現金及び預金、ならびに (2) 受取手形及び営業未収金
これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。
- (3) 投資有価証券
これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。
また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記をご参照ください。

負債

- (1) 支払手形及び営業未払金、ならびに (2) 短期借入金
これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。
- (3) 長期借入金
長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記をご参照ください。

（注）2 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

（単位：百万円）

区分	平成29年3月31日	平成30年3月31日
非上場株式 (*1)	494	496
子会社株式および関連会社株式 (*1)	6,452	6,698
長期預り保証金 (*2)	2,824	2,655
地震デリバティブ (*3)	17	18

- (*1) 非上場株式等については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3) 投資有価証券 其他有価証券」には含めておりません。
- (*2) 長期預り保証金については、償還時期を合理的に見積もることができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、時価評価は行っておりません。
- (*3) 地震デリバティブ取引の契約額等は3億円（契約最大授受額）ですが、時価については公正な評価額を算定することが極めて困難と認められるため、時価評価は行っておりません。

(注) 3 金銭債権の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度 (平成29年 3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超
現金及び預金	11,267	—
受取手形及び営業未収金	13,013	—
合計	24,280	—

当連結会計年度 (平成30年 3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超
現金及び預金	10,286	—
受取手形及び営業未収金	14,969	—
合計	25,255	—

(注) 4 長期借入金およびその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度 (平成29年 3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	2,390	—	—	—	—	—
長期借入金	799	2,982	6,309	5,102	553	9,850

当連結会計年度 (平成30年 3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	2,360	—	—	—	—	—
長期借入金	4,757	7,584	5,477	2,715	6,325	7,300

(有価証券関係)

1 その他有価証券

前連結会計年度 (平成29年3月31日)

(単位: 百万円)

	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
(連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの)			
株式	7,015	3,441	3,573
その他	9	8	0
小計	7,024	3,449	3,574
(連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの)			
株式	584	733	△148
小計	584	733	△148
合計	7,609	4,183	3,425

当連結会計年度 (平成30年3月31日)

(単位: 百万円)

	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
(連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの)			
株式	7,834	3,651	4,182
その他	9	8	0
小計	7,843	3,660	4,183
(連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの)			
株式	400	544	△144
小計	400	544	△144
合計	8,244	4,205	4,038

(注) 1 表中の「取得原価」は減損処理後の帳簿価額であります。

2 時価のある有価証券については、個々の銘柄の有価証券の時価が取得原価に比べ50%以上下落している場合は減損の対象とし、30%以上下落した場合は回復可能性の判断の対象とし、減損の要否を判断しております。

2 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	1,379	86	—
合計	1,379	86	—

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

（デリバティブ取引関係）

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

前連結会計年度（平成29年3月31日）

地震デリバティブ取引

地震デリバティブ取引の契約額等は3億円（契約最大授受額）ですが、時価については公正な評価額を算定することが極めて困難と認められるため、時価評価は行っておりません。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

地震デリバティブ取引

地震デリバティブ取引の契約額等は3億円（契約最大授受額）ですが、時価については公正な評価額を算定することが極めて困難と認められるため、時価評価は行っておりません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

金利関連

前連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 （百万円）	うち1年超 （百万円）	時価 （百万円）
金利スワップの 特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	2,000	2,000	△38

（注） 時価の算定方法 取引先金融機関から提示された価格等によっております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 （百万円）	うち1年超 （百万円）	時価 （百万円）
金利スワップの 特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	2,000	2,000	△26

（注） 時価の算定方法 取引先金融機関から提示された価格等によっております。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社においては、確定給付型の退職給付制度を設けており、その一部につき企業年金基金を採用しております。

連結子会社においては、確定給付型の退職給付制度または確定拠出型の退職給付制度を設けております。

一部の連結子会社が有する確定給付型の退職給付制度は、簡便法により退職給付に係る負債および退職給付費用を計算しております。

なお、当社においては退職給付信託を設定しております。

2 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く。）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付債務の期首残高	8,228	7,986
勤務費用	409	405
利息費用	10	18
数理計算上の差異の発生額	△165	89
退職給付の支払額	△496	△342
その他	0	△1
退職給付債務の期末残高	7,986	8,156

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
年金資産の期首残高	9,751	10,129
期待運用収益	98	102
数理計算上の差異の発生額	491	496
事業主からの拠出額	250	253
退職給付の支払額	△462	△331
その他	△0	△0
年金資産の期末残高	10,129	10,649

(3) 退職給付債務および年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債および退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	7,082	7,199
年金資産	△10,129	△10,649
	△3,047	△3,450
非積立型制度の退職給付債務	903	957
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△2,143	△2,492
退職給付に係る負債	918	975
退職給付に係る資産	△3,062	△3,468
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△2,143	△2,492

(4) 退職給付費用およびその内訳項目の金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
勤務費用	409	405
利息費用	10	18
期待運用収益	△98	△102
数理計算上の差異の費用処理額	354	287
過去勤務費用の費用処理額	△18	△18
確定給付制度に係る退職給付費用	658	591

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
数理計算上の差異	△1,012	△695
過去勤務費用	18	18
合計	△994	△677

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
未認識数理計算上の差異	△74	△769
未認識過去勤務費用	△31	△13
合計	△106	△783

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
債券	16%	20%
株式	27%	29%
一般勘定(生保)	8%	5%
合同運用口	32%	31%
その他	17%	15%
合計	100%	100%

(注) 1 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度26%、当連結会計年度27%含まれております。

2 合同運用口は、様々な種類の運用対象から構成されており、前連結会計年度の内訳は債券66%、株式34%、当連結会計年度の内訳は債券66%、株式34%であります。

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在および予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在および将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表しております。)

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
割引率	0.2%	0.1%
長期期待運用収益率	1.0%	1.0%

3 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債および退職給付に係る資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
退職給付に係る負債と退職給付に係る資産の純額の 期首残高	942	964
退職給付費用	165	174
退職給付の支払額	△50	△70
制度への拠出額	△93	△90
その他	△0	0
退職給付に係る負債と退職給付に係る資産の純額の 期末残高	964	978

(2) 退職給付債務および年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債および退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	2,020	2,121
年金資産	△1,264	△1,348
	756	772
非積立型制度の退職給付債務	208	205
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	964	978
退職給付に係る負債	991	1,004
退職給付に係る資産	△27	△26
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	964	978

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度165百万円 当連結会計年度174百万円

4 確定拠出制度

連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度44百万円、当連結会計年度41百万円であります。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	77百万円	27百万円
賞与引当金	329百万円	334百万円
退職給付に係る負債	332百万円	332百万円
固定資産未実現利益	239百万円	242百万円
繰越欠損金	301百万円	289百万円
減損損失	1,184百万円	1,196百万円
その他	433百万円	469百万円
繰延税金資産小計	2,898百万円	2,892百万円
評価性引当額	△1,584百万円	△1,587百万円
繰延税金資産合計	1,313百万円	1,305百万円
繰延税金負債		
退職給付に係る資産	－百万円	△89百万円
固定資産圧縮積立金	△875百万円	△1,291百万円
特別償却準備金	△9百万円	△20百万円
固定資産圧縮特別勘定積立金	△455百万円	－百万円
その他有価証券評価差額金	△1,046百万円	△1,235百万円
退職給付信託設定益	△243百万円	△243百万円
その他	△380百万円	△390百万円
繰延税金負債合計	△3,010百万円	△3,271百万円
繰延税金負債の純額	△1,697百万円	△1,965百万円

繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
流動資産－繰延税金資産	184百万円	368百万円
固定資産－繰延税金資産	577百万円	591百万円
流動負債－繰延税金負債	182百万円	－百万円
固定負債－繰延税金負債	2,277百万円	2,925百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異原因

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。		法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(企業結合等関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社および連結子会社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定および業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものがあります。

当社グループは、「倉庫」「港湾運送」「陸上運送」「国際複合輸送他」からなる総合物流事業を主たる事業として展開しております。

したがって、当社グループは、「総合物流事業」を報告セグメントとしております。

2 報告セグメントごとの売上高、利益、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。セグメント間の内部売上高又は振替高は市場実勢価格に基づいております。

3 報告セグメントごとの売上高、利益、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント	その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額 (注) 3
	総合物流事業				
売上高					
外部顧客への売上高	90,187	1,144	91,332	—	91,332
セグメント間の内部売上高又は振替高	27	1,662	1,689	△1,689	—
計	90,214	2,807	93,022	△1,689	91,332
セグメント利益	2,852	198	3,051	△71	2,979
セグメント資産	112,290	2,076	114,367	△1,529	112,837
その他の項目					
減価償却費	2,568	70	2,638	—	2,638
持分法適用会社への投資額	6,135	—	6,135	—	6,135
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	16,976	94	17,071	—	17,071

(注) 1 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、不動産業・建設業・損害保険代理店・自動車整備・ゴルフ場等を含んでおります。

2 調整額は、次のとおりであります。

(1) セグメント利益の調整額△71百万円は、セグメント間取引消去△71百万円によるものであります。

(2) セグメント資産の調整額△1,529百万円には、セグメント間取引消去△1,769百万円、報告セグメントに配分していない資産239百万円が含まれております。

3 セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント	その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額 (注) 3
	総合物流事業				
売上高					
外部顧客への売上高	94,513	1,095	95,609	—	95,609
セグメント間の内部売上高又は 振替高	25	2,179	2,204	△2,204	—
計	94,539	3,274	97,814	△2,204	95,609
セグメント利益	2,218	179	2,397	△52	2,345
セグメント資産	121,065	2,516	123,582	△2,365	121,216
その他の項目					
減価償却費	3,300	64	3,364	—	3,364
持分法適用会社への投資額	6,386	—	6,386	—	6,386
有形固定資産及び無形固定資産 の増加額	8,877	50	8,928	—	8,928

(注) 1 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、不動産業・建設業・損害保険代理店・自動車整備・ゴルフ場等を含んでおります。

2 調整額は、次のとおりであります。

(1) セグメント利益の調整額△52百万円は、セグメント間取引消去△52百万円によるものであります。

(2) セグメント資産の調整額△2,365百万円には、セグメント間取引消去△2,607百万円、報告セグメントに配分していない資産242百万円が含まれております。

3 セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	倉庫業	港湾運送業	陸上運送業	国際複合輸送業他	合計
外部顧客への売上高	34,790	19,813	17,814	17,769	90,187

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	その他	合計
81,219	10,113	91,332

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国または地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	倉庫業	港湾運送業	陸上運送業	国際複合輸送業他	合計
外部顧客への売上高	37,377	20,930	18,396	17,809	94,513

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	その他	合計
85,702	9,907	95,609

（注） 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国または地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

（単位：百万円）

顧客の名称または氏名	売上高	関連するセグメント名
イオングローバルSCM株式会社	9,634	総合物流事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント	その他	全社・消去	合計
	総合物流事業			
減損損失	50	—	—	50

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント	その他	全社・消去	合計
	総合物流事業			
当期償却額	13	—	—	13
当期末残高	27	—	—	27

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント	その他	全社・消去	合計
	総合物流事業			
当期償却額	13	—	—	13
当期末残高	13	—	—	13

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

重要な関連会社に関する注記

重要な関連会社は中部コールセンター株式会社であり、その要約財務情報は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
流動資産合計	—	843
固定資産合計	—	8,942
流動負債合計	—	1,323
固定負債合計	—	279
純資産合計	—	8,182
売上高	—	3,445
税引前当期純利益	—	1,120
当期純利益	—	777

(注) 中部コールセンター株式会社は、重要性が増したため、当連結会計年度から重要な関連会社としております。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	848円60銭	884円14銭
1株当たり当期純利益金額	62円85銭	32円55銭

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	55,948	58,591
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	1,716	1,907
(うち非支配株主持分)(百万円)	1,716	1,907
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	54,231	56,683
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(千株)	63,906	64,111

3 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	4,021	2,084
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	4,021	2,084
普通株式の期中平均株式数(千株)	63,986	64,034

⑤【連結附属明細表】

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	2,390	2,360	0.34	—
1年以内に返済予定の長期借入金	799	4,757	0.36	—
1年以内に返済予定のリース債務	202	133	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	24,797	29,402	0.48	平成31年4月 ～平成39年9月
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	211	156	—	平成31年1月 ～平成34年3月
合計	28,402	36,811	—	—

(注) 1 平均利率は、期末借入残高をもとにして、加重平均にて計算しております。リース債務は利息相当額を控除しない方法で計上しておりますので、平均利率は記載しておりません。

2 長期借入金およびリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年以内における返済予定額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
長期借入金	7,584	5,477	2,715	6,325
リース債務	74	39	22	11

3 リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の返済期限は、決算日が12月31日である海外連結子会社の残高を当期末残高に含めているため、平成31年1月～となっております。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首および当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首および当連結会計年度末における負債および純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	23,412	47,180	72,170	95,609
税金等調整前 四半期(当期)純利益金額 (百万円)	541	1,497	2,752	3,125
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益金額 (百万円)	315	983	1,883	2,084
1株当たり 四半期(当期)純利益金額 (円)	4.93	15.38	29.42	32.55

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり 四半期純利益金額 (円)	4.93	10.44	14.03	3.14

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	7,672	6,939
受取手形	303	※3 268
電子記録債権	213	※3 199
営業未収金	11,459	13,450
貯蔵品	16	20
前払費用	204	260
繰延税金資産	—	194
短期貸付金	271	215
その他	1,080	1,820
貸倒引当金	△50	△70
流動資産合計	※2 21,172	※2 23,297
固定資産		
有形固定資産		
建物	※4 13,006	※4 23,176
構築物	645	1,141
機械及び装置	1,021	1,745
船舶	0	0
車両運搬具	248	359
工具、器具及び備品	529	696
土地	※1 28,624	※4 28,505
リース資産	69	9
建設仮勘定	8,409	76
有形固定資産合計	52,555	55,710
無形固定資産		
ソフトウェア	741	573
その他	613	770
無形固定資産合計	1,354	1,344
投資その他の資産		
投資有価証券	7,366	7,880
関係会社株式	3,722	3,802
長期貸付金	1,383	1,624
前払年金費用	2,712	2,504
その他	911	844
貸倒引当金	△1,239	△1,334
投資その他の資産合計	14,856	15,322
固定資産合計	※2 68,766	※2 72,378
資産合計	89,938	95,675

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
電子記録債務	1,126	※ ₃ 1,158
営業未払金	5,414	5,622
短期借入金	8,120	9,003
1年内返済予定の長期借入金	540	3,715
リース債務	44	27
未払金	780	1,181
未払費用	203	243
未払法人税等	1,051	50
繰延税金負債	182	—
預り金	248	261
賞与引当金	618	630
その他	844	169
流動負債合計	※ ₂ 19,175	※ ₂ 22,062
固定負債		
長期借入金	22,485	23,582
リース債務	29	69
繰延税金負債	1,899	2,306
再評価に係る繰延税金負債	3,774	3,772
退職給付引当金	660	780
関係会社事業損失引当金	1,567	1,469
資産除去債務	31	32
その他	※ ₁ 218	216
固定負債合計	30,665	32,229
負債合計	49,841	54,292
純資産の部		
株主資本		
資本金	8,428	8,428
資本剰余金		
資本準備金	6,544	6,544
その他資本剰余金	188	196
資本剰余金合計	6,732	6,741
利益剰余金		
利益準備金	1,200	1,200
その他利益剰余金		
配当準備積立金	400	400
特別償却準備金	22	47
固定資産圧縮積立金	2,009	2,971
固定資産圧縮特別勘定積立金	1,041	—
別途積立金	6,400	6,400
繰越利益剰余金	14,153	15,058
利益剰余金合計	25,226	26,077
自己株式	△1,269	△1,189
株主資本合計	39,118	40,057
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	2,161	2,509
土地再評価差額金	△1,181	△1,183
評価・換算差額等合計	979	1,325
純資産合計	40,097	41,383
負債純資産合計	89,938	95,675

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高		
倉庫収入	34,686	37,362
港湾運送収入	18,082	19,107
運送収入	16,900	17,518
国際輸送収入	7,768	7,759
その他の収入	1,635	1,708
売上高合計	※1 79,073	※1 83,457
売上原価		
作業諸費	56,965	60,221
賃借料	5,975	6,370
減価償却費	1,290	1,800
人件費	4,879	4,742
その他	3,953	4,572
売上原価合計	※1 73,065	※1 77,708
売上総利益	6,007	5,748
販売費及び一般管理費		
人件費	※2 2,120	※2 2,146
減価償却費	414	356
業務委託費	534	599
貸倒引当金繰入額	1	1
その他	1,142	1,119
販売費及び一般管理費合計	※1 4,212	※1 4,224
営業利益	1,795	1,524
営業外収益		
受取利息	20	15
受取配当金	667	687
雑収入	185	164
営業外収益合計	※1 872	※1 867
営業外費用		
支払利息	131	139
為替差損	3	17
雑損失	2	23
営業外費用合計	※1 138	※1 180
経常利益	2,529	2,211
特別利益		
固定資産処分益	1,967	28
補助金収入	—	100
投資有価証券売却益	86	—
その他	97	—
特別利益合計	※1 2,150	※1 128
特別損失		
固定資産処分損	29	83
固定資産圧縮損	—	100
その他	—	50
特別損失合計	※1 29	※1 234
税引前当期純利益	4,650	2,105
法人税、住民税及び事業税	1,392	738
法人税等調整額	△40	△121
法人税等合計	1,351	616
当期純利益	3,299	1,489

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	8,428	6,544	188	6,732
当期変動額				
剰余金の配当				
当期純利益				
固定資産圧縮積立金の積立				
固定資産圧縮積立金の取崩				
固定資産圧縮特別勘定積立金の積立				
固定資産圧縮特別勘定積立金の取崩				
特別償却準備金の積立				
特別償却準備金の取崩				
自己株式の取得				
自己株式の処分				
土地再評価差額金の取崩				
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				
当期変動額合計	－	－	－	－
当期末残高	8,428	6,544	188	6,732

	株主資本							利益剰余金 合計
	利益剰余金							
	利益準備金	その他利益剰余金						
		配当準備 積立金	特別償却 準備金	固定資産 圧縮積立金	固定資産 圧縮特別 勘定積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	1,200	400	16	1,768	120	6,400	12,520	22,426
当期変動額								
剰余金の配当							△672	△672
当期純利益							3,299	3,299
固定資産圧縮積立金の積立				308			△308	－
固定資産圧縮積立金の取崩				△68			68	－
固定資産圧縮特別勘定積立金の積立					1,041		△1,041	－
固定資産圧縮特別勘定積立金の取崩					△120		120	－
特別償却準備金の積立			8				△8	－
特別償却準備金の取崩			△2				2	－
自己株式の取得								
自己株式の処分								
土地再評価差額金の取崩							173	173
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	－	－	5	240	921	－	1,632	2,800
当期末残高	1,200	400	22	2,009	1,041	6,400	14,153	25,226

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△1,198	36,389	1,368	△1,008	359	36,748
当期変動額						
剰余金の配当		△672				△672
当期純利益		3,299				3,299
固定資産圧縮積立金の積立		—				—
固定資産圧縮積立金の取崩		—				—
固定資産圧縮特別勘定積立金の積立		—				—
固定資産圧縮特別勘定積立金の取崩		—				—
特別償却準備金の積立		—				—
特別償却準備金の取崩		—				—
自己株式の取得	△71	△71				△71
自己株式の処分		—				—
土地再評価差額金の取崩		173				173
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			793	△173	620	620
当期変動額合計	△71	2,728	793	△173	620	3,348
当期末残高	△1,269	39,118	2,161	△1,181	979	40,097

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	8,428	6,544	188	6,732
当期変動額				
剰余金の配当				
当期純利益				
固定資産圧縮積立金の積立				
固定資産圧縮積立金の取崩				
固定資産圧縮特別勘定積立金の積立				
固定資産圧縮特別勘定積立金の取崩				
特別償却準備金の積立				
特別償却準備金の取崩				
自己株式の取得				
自己株式の処分			8	8
土地再評価差額金の取崩				
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				
当期変動額合計	—	—	8	8
当期末残高	8,428	6,544	196	6,741

	株主資本							
	利益剰余金							
	利益準備金	その他利益剰余金						利益剰余金 合計
		配当準備 積立金	特別償却 準備金	固定資産 圧縮積立金	固定資産 圧縮特別 勘定積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	1,200	400	22	2,009	1,041	6,400	14,153	25,226
当期変動額								
剰余金の配当							△640	△640
当期純利益							1,489	1,489
固定資産圧縮積立金の積立				1,056			△1,056	－
固定資産圧縮積立金の取崩				△94			94	－
固定資産圧縮特別勘定積立金の積立								－
固定資産圧縮特別勘定積立金の取崩					△1,041		1,041	－
特別償却準備金の積立			29				△29	－
特別償却準備金の取崩			△3				3	－
自己株式の取得								
自己株式の処分								
土地再評価差額金の取崩							1	1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	－	－	25	961	△1,041	－	905	850
当期末残高	1,200	400	47	2,971	－	6,400	15,058	26,077

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△1,269	39,118	2,161	△1,181	979	40,097
当期変動額						
剰余金の配当		△640				△640
当期純利益		1,489				1,489
固定資産圧縮積立金の積立		—				—
固定資産圧縮積立金の取崩		—				—
固定資産圧縮特別勘定積立金の積立		—				—
固定資産圧縮特別勘定積立金の取崩		—				—
特別償却準備金の積立		—				—
特別償却準備金の取崩		—				—
自己株式の取得	△3	△3				△3
自己株式の処分	83	92				92
土地再評価差額金の取崩		1				1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			348	△1	346	346
当期変動額合計	79	939	348	△1	346	1,285
当期末残高	△1,189	40,057	2,509	△1,183	1,325	41,383

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 資産の評価基準および評価方法

- ① 有価証券
子会社株式および関連会社株式
移動平均法による原価法
その他有価証券
時価のあるもの
決算期末日の市場価格等に基づく時価法
(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)
時価のないもの
移動平均法による原価法
なお、有価証券の分類は「金融商品に係る会計基準」によっております。
- ② たな卸資産 (貯蔵品)
移動平均法による原価法
(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

2 固定資産の減価償却の方法

- ① 有形固定資産 (リース資産を除く)
定額法を採用しております。
- ② 無形固定資産 (リース資産を除く)
定額法を採用しております。
なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間 (5年) に基づく定額法を採用しております。
- ③ リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

3 引当金の計上基準

- ① 貸倒引当金
債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。
- ② 賞与引当金
従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。
- ③ 退職給付引当金
従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。
なお、企業年金基金については、年金資産の額が、退職給付債務に未認識過去勤務費用および未認識数理計算上の差異を加減した額を超過しているため、当該超過額を前払年金費用として投資その他の資産に計上しております。
過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数 (10年) による定額法により発生年度から費用処理しております。
数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数 (10年) による定額法によりそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。
- ④ 関係会社事業損失引当金
関係会社の事業の損失に備えるため、関係会社の財政状態等を勘案して、当社が負担することとなる損失見込額を計上しております。

4 ヘッジ会計の方法

特殊処理の要件を満たしている金利スワップ取引は特例処理を行っております。

5 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異および未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

6 消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(貸借対照表関係)

※1 担保資産および担保付債務
(前事業年度)

担保に供している資産はありませんが、長期預り保証金40百万円について、土地795百万円の担保設定予約があります。

(当事業年度)

該当事項はありません。

※2 関係会社に対する資産および負債

関係会社に対する金銭債権又は金銭債務の金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
短期金銭債権	1,335百万円	1,261百万円
長期金銭債権	1,383百万円	1,624百万円
短期金銭債務	6,857百万円	8,059百万円

※3 期末日満期手形、電子記録債権及び電子記録債務

期末日満期手形、電子記録債権及び電子記録債務の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形、電子記録債権及び電子記録債務が、期末残高に含まれております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
受取手形	一百万円	42百万円
電子記録債権	一百万円	4百万円
電子記録債務	一百万円	24百万円

※4 国庫補助金等による固定資産圧縮記帳額

国庫補助金等により有形固定資産の取得価額から控除している圧縮記帳額およびその内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
建物	99百万円	99百万円
土地	一百万円	100百万円

5 保証債務

以下の会社の金融機関からの借入金について下記金額の債務保証および保証予約を行っております。

(債務保証)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
トランスシティロジスティクス中部株式会社	812百万円	トランスシティロジスティクス中部株式会社 650百万円
ジェイトランス株式会社	156百万円	ジェイトランス株式会社 97百万円
Trancy Logistics(Shanghai) Co., Ltd.	117百万円	Trancy Logistics(Shanghai) Co., Ltd. 80百万円

(保証予約)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
四日市コンテナターミナル株式会社	199百万円	四日市コンテナターミナル株式会社 172百万円

(損益計算書関係)

※1 関係会社との営業取引及び営業取引以外の取引の取引高の総額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業取引高		
売上高	6,058百万円	6,151百万円
売上原価等	29,514百万円	31,919百万円
営業取引以外の取引高	758百万円	1,644百万円

※2 人件費に含まれている賞与引当金繰入額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	160百万円	170百万円

(有価証券関係)

子会社株式および関連会社株式で時価のあるものはありません。

なお、市場価格がないため、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式および関連会社株式は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
子会社株式	2,373	2,432
関連会社株式	1,348	1,369
計	3,722	3,802

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	66百万円	19百万円
賞与引当金	187百万円	190百万円
長期未払金	15百万円	14百万円
貸倒引当金	387百万円	422百万円
関係会社事業損失引当金	473百万円	443百万円
退職給付引当金	37百万円	148百万円
その他	302百万円	340百万円
繰延税金資産小計	1,470百万円	1,579百万円
評価性引当額	△1,016百万円	△1,034百万円
繰延税金資産合計	453百万円	544百万円
繰延税金負債		
固定資産圧縮積立金	△869百万円	△1,285百万円
特別償却準備金	△9百万円	△20百万円
固定資産圧縮特別勘定積立金	△455百万円	－百万円
その他有価証券評価差額金	△935百万円	△1,085百万円
退職給付信託設定益	△243百万円	△243百万円
その他	△21百万円	△21百万円
繰延税金負債合計	△2,534百万円	△2,656百万円
繰延税金負債の純額	△2,081百万円	△2,112百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異原因

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。		法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(企業結合等関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	13,006	11,444	51 [44]	1,224	23,176	26,693
	構築物	645	626	1	128	1,141	3,485
	機械及び装置	1,021	947	0	223	1,745	3,858
	船舶	0	—	—	—	0	16
	車両運搬具	248	204	2	91	359	2,749
	工具、器具及び備品	529	353	0 [0]	186	696	3,626
	土地	28,624 (2,592)	—	119 (3) [6]	—	28,505 (2,589)	—
	リース資産	69	3	31	33	9	53
	建設仮勘定	8,409	522	8,856	—	76	—
	有形固定資産計	52,555	14,104	9,061 [50]	1,886	55,710	40,483
無形固定資産	ソフトウェア	741	96	—	264	573	2,094
	その他	613	387	224	6	770	863
	無形固定資産計	1,354	484	224	270	1,344	2,958

(注) 1. 当期減少額の[]は内数で、当期の減損損失計上額であります。

2. 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

建物	幸手物流センター 倉庫・事務所	10,629百万円
	YK倉庫 冷凍設備	545百万円
構築物	幸手物流センター アスファルト舗装	558百万円
機械及び装置	幸手物流センター 物流作業機器等	820百万円
車両運搬具	ストラドルキャリア	100百万円
工具、器具及び備品	バルクコンテナ	71百万円
ソフトウェア	輸出入管理システム	73百万円

3. 土地の当期首残高、当期減少額および当期末残高の(内書)は、土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)および土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律(平成11年3月31日公布法律第24号、平成13年3月31日公布法律第19号)により行った事業用土地の再評価実施前の帳簿価額との差額であります。なお、当期減少額は売却と減損によるものです。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	1,289	129	15	1,404
賞与引当金	618	630	618	630
関係会社事業損失引当金	1,567	—	98	1,469

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	1,000株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	—
買取・買増手数料	無料
公告掲載方法	当会社の公告方法は電子公告であります。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。 なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりであります。 http://www.trancy.co.jp
株主に対する特典	該当事項はありません。

- (注) 1 当会社の単元未満株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の行使をすることができません。
- ・会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - ・取得請求権付株式の取得を請求する権利
 - ・募集株式または募集新株予約権の割当てを受ける権利
 - ・単元未満株式の買増しを請求する権利
- 2 基準日後に株式を取得した者の議決権行使
必要がある場合は、取締役会の決議によってあらかじめ公告して、一定の日の株主名簿に記載または記録された株主または登録株式質権者をもってその権利を行使することができる株主または登録株式質権者としてすることができます。
- 3 平成29年9月26日開催の取締役会決議に基づき、平成30年4月1日をもって1単元の株式数を1,000株から100株に変更しております。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当会社には、法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- | | | | |
|---------------------------|--|---|--|
| (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書 | 事業年度
(第103期) | 自 平成28年4月1日
至 平成29年3月31日 | 平成29年6月29日
関東財務局長に提出 |
| (2) 内部統制報告書及びその添付書類 | 事業年度
(第103期) | 自 平成28年4月1日
至 平成29年3月31日 | 平成29年6月29日
関東財務局長に提出 |
| (3) 四半期報告書及び確認書 | 第104期
第1四半期
第104期
第2四半期
第104期
第3四半期 | 自 平成29年4月1日
至 平成29年6月30日
自 平成29年7月1日
至 平成29年9月30日
自 平成29年10月1日
至 平成29年12月31日 | 平成29年8月10日
関東財務局長に提出
平成29年11月10日
関東財務局長に提出
平成30年2月13日
関東財務局長に提出 |
| (4) 臨時報告書 | 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2
(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書 | | 平成29年6月30日
関東財務局長に提出 |

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月27日

日本トランスシティ株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 川 勝 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 新 家 徳 子 印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本トランスシティ株式会社の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本トランスシティ株式会社及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、日本トランスシティ株式会社の平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、日本トランスシティ株式会社が平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が連結財務諸表及び内部統制報告書に添付する形で別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月27日

日本トランスシティ株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 川 勝 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 新 家 徳 子 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本トランスシティ株式会社の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第104期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本トランスシティ株式会社の平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月28日
【会社名】	日本トランスシティ株式会社
【英訳名】	Japan Transcity Corporation
【代表者の役職氏名】	取締役社長 小 川 謙
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	三重県四日市市霞二丁目1番地の1
【縦覧に供する場所】	日本トランスシティ株式会社 中部支社 名古屋支店 (名古屋市中村区名駅南一丁目16番28号 NMF名古屋柳橋ビル) 日本トランスシティ株式会社 関東支社 東京支店 (東京都港区高輪三丁目23番17号 品川センタービルディング) 日本トランスシティ株式会社 関西支社 大阪支店 (大阪市中央区南本町三丁目6番14号 イトウビル) 株式会社名古屋証券取引所 (名古屋市中区栄三丁目8番20号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長小川謙は、当社の財務報告に係る内部統制の整備および運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備および運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成30年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備および運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社ならびに連結子会社および持分法適用会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的および質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社ならびに連結子会社および持分法適用会社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。なお、金額的および質的重要性の観点から財務報告に及ぼす影響が僅少であると判断される連結子会社および持分法適用会社については、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、前連結会計年度の連結売上高の2/3以上を占める当社および持分法投資利益に金額的重要性を有する持分法適用会社を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、事業目的に大きく関わる勘定科目として「売上高」に至る業務プロセスを評価の対象とし、「たな卸資産」については、事業目的に大きく関わるものではなく、かつ金額的および質的重要性の観点から財務報告に及ぼす影響は僅少であると判断し、含めておりません。なお、当社については、売上高の95%以上を占める主幹事業（総合物流業）を構成する倉庫業、港湾運送業、陸上運送業、国際複合輸送業における売上高に至る業務プロセスを評価対象とし、また選定した持分法適用会社については、当社の倉庫業と密接に関連する事業における売上高に至る業務プロセスを評価対象といたしました。

3【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4【付記事項】

該当事項はありません。

5【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月28日
【会社名】	日本トランスシティ株式会社
【英訳名】	Japan Transcity Corporation
【代表者の役職氏名】	取締役社長 小 川 謙
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	三重県四日市市霞二丁目1番地の1
【縦覧に供する場所】	日本トランスシティ株式会社 中部支社 名古屋支店 (名古屋市中村区名駅南一丁目16番28号 NMF名古屋柳橋ビル) 日本トランスシティ株式会社 関東支社 東京支店 (東京都港区高輪三丁目23番17号 品川センタービルディング) 日本トランスシティ株式会社 関西支社 大阪支店 (大阪府中央区南本町三丁目6番14号 イトウビル) 株式会社名古屋証券取引所 (名古屋市中区栄三丁目8番20号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長小川謙は、当社の第104期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。